

※報告当日は短くまとめたものを配布予定です。

批判的社会理論としての A.ホネット「物象化 - 本源的承認」論の再構成を目指して —D.W.ウィニコットおよび W.R.D.フェアベーンの原初的対象関係論に依拠して—

立命館大学衣笠総合研究機構 客員研究員／佛教大学他 非常勤講師
藤本 美貴(FUJIMOTO, Yoshitaka)
trichromatic@live.jp

I 背景と問題

本報告の目的は、D.W.ウィニコットならびに（補助線として）W.R.D.フェアベーンの精神分析学的対象関係論に依拠しつつ、A.ホネットの「物象化 - 本源的承認」論を批判的社会理論の観点から再構成することにある。

1-1. 物象化 - 本源的承認論の概要

ホネットは『物象化——承認論からのアプローチ』（[2005] 2015=2011 以下 V と略記）において、「本源的承認 (elementare Anerkennung)」すなわち、感情中立的な観察者の認識に個体発生上もカテゴリ（概念）上も先行しその根底を成す、情動のかつ前反省的な承認形式を新たに提起した。他者の存在を気に留め呼応するという意味での情動性を有しつつも“認識 (Erkennung) に先立つ”という性質は、『承認をめぐる闘争』（[1992] 2003=2014 以下 KuA と略記）を皮切りに展開した従来の 3 つの承認類型、すなわち、第 1 の親密圏における「愛 (Liebe)」を含む従来の承認形式とも一線を画す点である。日暮雅夫 (2008: 199-203) も指摘するように、従来の承認類型においては相互にコンフリクトが生じる可能性が想定されており、なおかつその際は、「認知的な尊重 (kognitive Achtung)」を承認様式とし「道徳的な責任能力 (moralische Zurechnungsfähigkeit)」を人格性の領域とする「法的関係 (権利) (Rechtsverhältnisse (Rechte))」の形式 (KuA 211=175) に象徴される、「あらゆる主体が等しくその個人的自律の尊重 (Respekt ihrer individuellen Autonomie)」に向けて掲げる要求が絶対的に優先する」(Honneth [2000a] 2000: 190=2005: 207 以下、下線は引用者) と考えられていた。一方で本源的承認は、そうした認知的な契機、およびそれに密着した道徳的自律性と緊張関係を結びうる情動や欲求とは根本的に別次元として位置づけられており、他者や自分自身への「実存的な関与 (existentiellen Involviertheit)」(V 30=34) という次元に焦点が当てられている。

ホネットによると、本源的承認が帯びる情動性には、従来の愛の承認形式とは違って「何らかの肯定的な関心や尊敬といった意味での規範は含まれていない」(Honneth [2008] 2015: 170 以下 E と略記²⁾)。つまり、

「私がその他者の感情世界にいわば実存的に引きこまれていると感じるような一定の態度」(V 56=67) であれば、その態度に付随する情動の個別の性質や後続する所作がいかなるものであるか——愛情的ないし友好的な態度なのか、嫌悪的・憎悪的な態度か、それらがなく交ぜになった態度か、はたまた冷淡な態度かなど (E 171)——は本質的な問題とはならないという。ホネットが「共感」という概念との関わりで多少とも用いる「肯定的 (positiv)」という形容詞は、あくまで、他者の実存的価値を肯定せざるを得ないといった意味でのみ用いられている (V 59=70)。

対して「物象化 (Verdinglichung)」は、本源的承認の「忘却 (Vergessenheit)」あるいは「記憶喪失 (Amnesie)」の現れであり、他者や自身との実存的関わりを断ち切り、物的な所与と捉えようとする誤った慣習的実践態度と定義される。ただし、本源的承認と物象化は「純粋な対立物では決してない」(V 64=79)。むしろ、後者は前者を産出源としており (V 64=79)、「客体化 (Objektivierung)」という観察の態度を経てそれが習慣化され、「先行する承認に由来しているという感覚がもはや失われているような認識の形式」(V 66=82) と化したものが物象化である。そのため、「本源的な態度がその社会構成的な機能ゆえに決して完全に失われてしまうことはありえない」(V 64=80)。のちに、単に「(本源的) 承認に対する侵犯」と言わずに、“承認が認識に先立つ”という「優先順序に対する侵犯」(E 169) と厳密に定義されたのも、このためである。つまり、自らの産出源そのものの存在領域を食い潰すということではなく、本源的承認の有する産出的および承認要求的な働きに対する一時的麻痺とでもいふべき事態として、物象化は把握されている。構造上相互に無関係な領域間での偶発的対立と捉えない点、そして認識的遂行の一形式でありながら認識的な反省にもはや訴えかけることが不可能な態度と捉える点に、ホネットによる物象化理解の特徴が集約されている。

1-2. 社会的文脈をめぐって：ネオリベリズムとイデオロギー化した承認領域の共振という問題

このように、一般に認められた既存の道徳原理への侵

害ではなく、その「全ての議論の基礎である基底的条件」(E 168)への侵害に対する存在論的次元での批判の可能性を模索した物象化 - 本源的承認論は、従来の承認論とそれが有する「規範的な含意 (normativen Implikationen)」(V 26=26)をより一層、人間学的に深め、あるいは拡大しようとしたものと評価できよう。

だが実際は、これまでのところ否定的な意見が数多く寄せられている。その大半は G.ルカーチ解釈のあり方に関するものである (Chari, A. 2010; Hall, T. 2011; 奥谷浩一 2014 etc.)。つまり、ホネットによる承認論的展開は、物象化論を社会経済的基盤から切り離し、個々人の相互作用的局面へと問題を極度に切り詰めるものであり、近代資本主義社会を批判する思想的ないし社会理論的分析視点もそれを超克する契機も一切見出すことができない、という批判である。J.F.ドライアー (2015: 373-4)が整理するように、とりわけルカーチアンらにとっては、社会システムの合理的な諸形態が社会的行為者の意識を貫くことで、資本主義社会における客観的および主観的形態の双方を組織化するといった、ルカーチの鍵的洞察たる弁証法的パースペクティブをホネットが完全に無視しているように見えるだろう。確かにホネットは、それ自身が“明確な”社会批判と社会的変革を目指す規範的性格を前提としているという理由で、「資本主義社会の確立とともに間主観的行為の支配的様式となった商品交換の拡張」(V 20=20)のみを物象化の恒常化と拡大の要因とするルカーチのテーゼを斥けながらも、自身が自らに課したはずの「社会的病因論 (sozialen Ätiologie)」(V 93=123)の解明について、本質的な議論を展開するまでには至っていない。物象化概念を、経済的関心を越えた、(ルカーチにも見出されるという)人格の個々の潜在性や能力にまで影響を及ぼす間主観的实践として展開することが主目的であったとはいえ、「物象化の社会的起源 (Soziale Quellen der Verdinglichung)」(V 91=119)と題された最終章は尻すぼみの内容で終わっている。

とはいえ、思索の前後関係をみれば、『物象化』が明確な社会(経済)的文脈との関わりを想定した著書であることは自ずと明らかとなろう。ホネットはとりわけ前年に発表した 2 つの論文 (Honneth und Haltmann, M. [2004] 2010=2017 以下 PdkM と略記; Honneth [2004] 2010=2017 以下 AaI と略記)において、資本主義社会の「ネオリベラリズムの改革 (Die neoliberale Revolution)」を遂げたいま、「個人主義の観念」を加えた従来の承認形式に対応する規範的理念が、次々とその批判的潜勢力を失い、いかに現行の経済システムを正当化する「イデオロギー」と化していくか/いったかを論じている。かつて戦後から社会民主主義時代においては、いずれの承認領域も社会の道徳的發展を推し進める規範

的潜勢力となっていた。つまり、既存の現実を超えた自己実現や善き生の機会を拡大させつつ、他方では資本主義的な価値増殖命令を中立化させ、資本蓄積の傾向を抑制する働きを成していた (PdkM 226-8=253-4)。ところが 80 年代初頭以降の、福祉国家による価値増殖への制御活動低下に伴う保障政策の低減、グローバル企業の勢力拡大に伴う階級分化の絆の弱体化と株主資本主義、そして自己責任のもとで自らの能力と情緒的資源を投入し高い柔軟性を持って新たなプロジェクトに取り組む姿勢が信頼につながる、いわゆる「資本主義の新たな精神」(Boltanski, L. et Chiapello, E. 1999=2013)の下では (PdkM 228-30=256-7)、既存の承認領域は、諸個人のもつ「歴史的に変化可能な価値特性 (historisch wandelbare Werteigenschaften)」(AaI 114=123-4)に訴えかけることはもはやできず、社会的生活世界の今一つの側面、すなわち、〈社会化〉を目指し続けようとする「第二の自然」としての習慣性(学習過程)のみを推し進め、結果として個人を“過剰”適応へと促す。こうして本来はシステムの側から持ち込まれるはずの道具的合理性は、むしろ生活世界の側からの植民地化によって拡大され (PdkM 236=264)、両者は一種の共謀関係へと陥る。そしてシステム - 生活世界による一元的で混成的な「第二の自然」化が貫徹されようとしていく――。

以上から明らかなように、『物象化』においてホネットが問題視していた「社会的に作用する思考図式 (sozial wirksame Denkschemata)」(V 71=89)、言い換えれば「物象化作用を及ぼす信念体系 (verdinglichenden Überzeugungssysteme)」(V 97=127)とは、まさにかかるネオリベラリズムという新たな精神を指し、それと共振する「特殊なイデオロギーの内容」(V 97=127)とは、批判的潜勢力と歴史性を失いイデオロギーへと転落した既存の承認領域を指しているものと考えるのが妥当であろう。その意味で彼の物象化論もまた、やや不鮮明ながらも社会理論的関心に支えられていたのである。

1-3. 問題

出口剛司 (2010: 26)は、かかる困難な事態を、既存の承認領域のイデオロギー的転落という現象に基づいて「パラドックス」と名指すこと自体が、この時代において求められる批判の形ではないかと述べている。確かにその通りではある。だが、ホネットが今一度そうした事態を承認論の観点から間主観的に捉え返そうとした事実こそ、より一層重点を置くべきではないかと筆者は考える。レイシズム、人身売買、就職面接といった具体的局面の散発的な羅列という結果に終わりながらも (V 95=124, 101=132)、彼が終始迫ろうとした個々の相互作用場面と物象化的態度へと陥るプロセスは、そのまま、

現在に至るまでの社会経済的な物象化が進行していく歴史的コンテクストと相似するものである。と同時に、前者の文脈において超越論的承認の可能性を新たに導入したのは、従来のような制度化への訴えを前提としつつもイデオロギーへと転落してしまった承認領域とは根本的に異質の社会批判と連帯のあり方をもたらす、新たな規範的潜勢力の源泉をその内部に見出そうとしたからに他ならない³⁾。

本報告の目的は、まさにこの「本源的承認」という新たな形式に込められた批判的社会理論としてのエッセンスを明らかにすることにある。その際、予てからのホネットの関心ならびに批判理論の知的伝統に倣って、精神分析学、とりわけその一翼を担う「対象関係論 (Object-Relations Theory)」を理論装置として採用したい。かつてホネット ([2000b] 2003=2015 以下 OupI と略記; [2001] 2010=2017 以下 WdN と略記) は、ネオリベラリズム的状况下で個人に要請される「ポストモダンの自己 (postmoderne Identität)」の生成メカニズムと、そのなかに潜在する精神的危機の様態を、D.W.ウィニコットに依拠して見出そうとした。そして後者を「否定性 (Negativität) の契機」と捉え、批判的潜勢力の源泉と位置付けたのであった。以下ではその具体的な内容を整理しつつも (II)、今次見出されるべき契機が、さらに深刻であり原初的な発達段階に潜在するものであることを対比的に明らかにする (III)。と同時に、そうして新たに見出されるべき契機が、翻って『物象化』における人間学的記述をいかに再構成するものであるかを明らかにしたうえで (IV)、最後に、従来とは異質な形で見出されるべき社会批判と連帯のプロセスを明らかにしたい (V)。

II ホネットによる対象関係論の受容とその空転化

ホネットは「個人の終焉」というテーゼで捉えられる戦後の大衆社会状況において、かつてのナチズム批判と自由主義国家への展望をめぐる精神分析の受容、すなわち、S.フロイトのエディプス・コンプレックスに象徴される父性的権威 (超自我) との間の両価的な情動関係に根差し、自我のサド・マゾ的性格を帯びた欲動充足という危機と、近代的な自律的主体形成の可能性とを見出す作業は、もはやアポリアへと陥らざるを得ないと考えた (OupI 138-9=200)。個人は「内的な諸審級の間に矛盾・葛藤がないため、社会的矛盾を感知しえな」(出口 2011: 426) になったからである。だがそうした困難な状況にありながらも、彼は新たな批判的契機を兼ね備えた主体像の誕生可能性とそれを担保し得る社会的背景の解明に乗り出す。それが「ポストモダンの自己」あるいは「ポストモダン・アイデンティティ」と呼ばれるものであった。

「自分のアイデンティティのさまざまな部分をより高次の段階で統合するといったことを、もはやまったく必要としない」(OupI 140=202) この自己は、「慣習的な役割帰属と固定的な行動期待の諸条件のもとでありえたよりも、もっと多くの内面的なアイデンティティの可能性を認め意識するという主体の傾向」(OupI 140-1=202) を持つ。端的に言うところ「主体の精神内の多元化 (einer intrapsychischen Pluralisierung von Subjekten)」(OupI 141=203) である。かつて「自我」概念に価値的に込められた「統合 (Integration)」「総合 (Synthese)」という働きではもはや捉え切れない主観的变化とその生成メカニズムが、「アイデンティティ」「自己」という概念を主軸に据えて論じられるべきと考えられたのである。ホネットにとって、乳幼児と一次的準拠人格 (母親) との情動的な相互作用経験について論じたウィニコットは、多元的自己に通ずる「内面生活の形成をさまざまな相互作用関係の内面化という葛藤に満ちた過程としてとらえようとする」(OupI 145=207) ものであり、恰好の理論装置であった。以下、その論点を段階的に整理しておこう。

2-1. 最初期の精神構造：環境との共生的一体化，欲求の諸〈衝動〉からなる無秩序の複合体

子どもの精神は、「一次的な準拠人格との最初の基本的な相互作用経験が初期形式の〔自己との〕再帰関係への道を開くまで」(OupI 147=210) は「体験の諸刺激と欲求の諸衝動とからなるまさに無秩序の複合体 (ungeordneten Komplex von Erlebnisreizen und Bedürfnisimpulsen)」(OupI 147=210) である。「第一次ナルシズム」「共生」などと称されるこの最初期の段階では、何らかの欲求を「それらに対応して充足をもたらしてくれる準拠人格の反応とまさに融合したものととらえており、そのため、乳児の感情体験においては、自身の自己と現実とのあいだになんの隔たりもありえない」(OupI 151=215)。この段階での乳児は、単に身体的な生存確保という実践の意味を超えて、「自分がなにかを体験するというより深い意味においても」(OupI 151=215) 一次的準拠人格の世話に全面的に依存しているため、自らを取り巻く環境への反応行動から成るといっても、周囲の環境からはまだ全く切り離されていない。

2-2. 〈衝動〉〈欲動〉充足を通じた精神の段階的組織化

その後、乳児は相互作用の相手の行動、すなわち「自分自身の衝動や欲動 (Impulse und Antriebe)」(OupI 151=215) を満たしてくれるような相手の行動から、自らの未だ組織されていない体験遂行に自らがどう関係するか (自己関係) を徐々に学び始め、精神の組織化、す

なわち「精神内部の諸関係パターン」(OupI 147=210)へと変換する最初の段階へと入る。また、それに応じて様々な内的諸審級を形成していく。ホネットは G.H.ミードの言う〈Me (客我)〉に内的審級が多化する根拠を見出したうえで、ウィニコットにも同種の観点、すなわち、「道徳的感情であれ、自分の意志に基づく行為であれ、あるいは欲求の表現であれ」(OupI 147=210) いかなる自己関係から生じる心的活動も、かかるコミュニケーション的関係の内面化に起源を有するという観点が見出されるとしている。

だがそうした〈社会化 (Vergesellschaftung)〉の過程には、同時にまた〈個人化 (Individuierung)〉という逆方向の課題も付随している。それは「周囲の社会的世界と一線を画するために〔外部とのコミュニケーション的関係を〕精神内部の資源として役立つ」(OupI 148=211) であるという課題であり、こうした「境界線を引くという原理」(OupI 148=211) によって、他方では「外部の対象や準拠人格や刺激に対しそれらに左右されず独立するという主体の能力は高まっている」(OupI 148=211) くる。そしてこの独立を維持し、推し進めるものとして、精神の組織化の段階においても「ほとんど組織化されない残余」(OupI 148=212) であり続ける「エス (イド)」、すなわち、生来的に「手つかずに残され」(OupI 149=213) たままだった領域が「無意識のさまざまな行為衝動と欲動要求 (Handlungsimpulsen und Triebforderungen) のストックになる」(OupI 149=213)。これはミードの言う〈I (主我)〉に相当し、「精神内部の開かれたコミュニケーション空間のなかで … [中略] … 自分の欲求の表現においてより高度に個人化されるために、社会的環境との妥協形成のそのつどの到達水準をあらためて越え」(OupI 149=213) よ、といった「無言の諸要求」(OupI 149=213) を絶え間なく強いる。ホネットは、このエスに支えられた個人化への力動があるからこそ、ウィニコットの言う社会化においては、「『自分自身と』ひとりきりでいる能力、また遊びのなかで自身の欲求ポテンシャルを創造的に発見する (im Spiel das eigene Bedürfnispotential kreativ zu entdecken) 能力」(OupI 148=212) もまた見出されるのだという。

2-3. 精神的危機の可能性=否定性の契機: 移行対象を通じた分離不安、共生状態への融合願望

最後にホネットは、理想的諸条件の下での〈社会化〉と〈個人化〉という、一見すると「社会と個人を予定調和的に捉える」(出口 2011: 432) だけに見える議論のなかに、そうした関係に緊張をもたらすような危機の可能性を、ウィニコットの有名な「移行対象 (transitional object)」という概念を通じて見出そうとする。

移行対象とは、おもちゃの部品やクッションや自身の親指といった身近にある物のなかで、「感情のきわめて充溢した関係を結ぶ」(OupI 152=216) 対象を指す。乳幼児はこの対象に対し共生的な愛情を込めると同時に「繰り返し激しく攻撃し破壊しようと試みる」(OupI 152=217)。つまり、移行対象という存在は「融合しているという一次的体験と分離しているという経験とのあいだの存在論的媒介項」(OupI 152=217) であり、乳幼児による愛憎両面からの関わりは「内部の現実と外部の現実との … [中略] … 裂け目を繰り返しシンボリックに架橋しよう」(OupI 152=217) という試みなのである。

ホネットは、こうした『中間的』体験地帯 (OupI 152=216) の只中に潜在している「分離不安」に着目する。それは、精神の組織化に伴う乳幼児の側の独立をめぐる不安・苦痛だけでなく、準拠人格の側の独立性、すなわち「子ども自身の願望幻想には左右されない準拠人格という現実」(OupI 151=216) を受け入れ、それを情動的な承認をもって成し遂げねばならないといった課題に伴う苦痛をも意味する (OupI 151=216)。移行対象は、そうした外的現実としての準拠人格の独立性を受け入れる補償として、「自分の根源的な共生幻想を生きながらえさせ、同時にまたその共生幻想を現実に対し創造的に試す」(OupI 152=217) 効果を持つ。

かかる中間的媒介領域は、芸術や宗教への文化的客体化への関心という形で生涯存在し続けるが (OupI 153=218)、そうした創造性への活力が期待される一方で、分離不安の裏には常に「主体の中で無意識的にはたらく結合願望、服従への憧憬、征服幻想など (Bindungswünschen, Unterwerfungssehnsüchten oder überwältigungsphantasien)」(WdN 260=291) といった精神的危機の可能性が内包されている。ホネットは乳幼児と母親への経験的観察を実施した乳幼児心理学者の R.スピッツや、J.ボウルビイの文化人類学的研究にも触れつつ、たとえ身体的欲求の充足が確保されていても、母親の「慈しみの欠如」などといった情動的結びつきが希薄であったとき、「子どもの独り立ちの過程で人格相互のあいだに生じた障害」(WdN 257=288) という形で残り続けるという。つまりそうした「剥奪 (deprivation)」経験は、移行対象への情動的関わりでも処理し切れないほどの過剰な独立への要求として作用し、かつての共生状態への「融合願望 (Verschmelzungswunsch)」(OupI 154=219) を象徴する病理を生み出すというのである。

2-4. 〈衝動〉と〈欲動〉の決定的な違い、精神的組織化に向けた創造的行為

ところで「共生幻想の創造的な試行」とあったように、移行対象を通じた分離不安への対処は、先述のエスに支

えられた個人化への力動の内容とリンクしている。つまり、相互の独立性を受け入れる背景には、やはりまた最初期の精神構造に根差した欲求が関わっている。

ただしそれは、最初期の無秩序で明確な対象への志向性を持たない欲求のみに由来しているという意味ではない。ホネットは H.レーワルドに倣い、〈衝動 (Impuls)〉すなわち、「方向性をまったく欠いてなんらの構造もな」(OupI 155=221)い「単に有機的なものと考えられうる」(OupI 156=221)段階と、〈欲動 (Trieb)〉すなわち、「欲求のうちでも、それが充足した状況の体験についての基本的な記憶心象の形式 (Form von elementaren Erinnerungsbildern) でなんらかの対象といわば融合し、そうなることで … [中略] … 精神的に表象可能にな」(OupI 156=221-2) った段階を明確に区別する。それは、準拠人格による規則的な欲求充足行為 —— 「環境とのとりとめのない交流」(OupI 156=222) —— を経て組織化された欲求の形態である。乳幼児は、こうした対象の「記憶イメージ (mnemischer Bilder)」(OupI 156=222) を用いることのできる段階を経るからこそ、準拠人格とのコミュニケーション的関係の内面化にも、それによる多元的な諸審級の形成にも、そしてまた分離不安への対処のための創造的試行にも打ち込むことができるのだ。

加えて、準拠人格の適切な養育行為による欲動の組織化は、乳幼児のなかに「興奮のプロセスそれ自体を産出」(OupI 156=222) するという側面も持つ。組織化する創造的行為というのは、まさにこの興奮のプロセスそのものを指す。そしてこの創造性を糧に、欲動エネルギーが自由に用いられるなかで、いよいよ「対象と一体になり融合しているという錯覚 (Illusion) が打ち砕かれ」(OupI 157=223) たとき、「欲動エネルギーの一部が今度は、相互主体的交流を適切に築くのに役立つように、そうした認知的はたらきの組織化 (Organisation von solchen kognitiven Leistungen) のために用いられねばならぬ」(OupI 157=223-4) くなる。ここで欲動エネルギーは、「構造を欠いた『エス』の領域と基本的な自我機能の組織化された領域 (den organisierten Bereich elementarer Ich-Funktionen) とに」(OupI 159-60=224) 分かれ、その後も超自我を含む分化プロセスが行われていくという。

従来「愛」の承認形式を基盤とする以上の分析は、しかしながら既に述べたように、ネオリベリズム的改革後久しい現代においては —— かつての戦後大衆社会状況下における批判理論の苦悩と同様に —— もはや空転を免れない。出口は、共生状態への暴力的な融合願望の現れとして「過剰なまでに純粋な関係性や親密性に対する欲望」や「親密圏における暴力やさまざまなアディ

クション」(出口 2011: 436) を挙げているが、これらはもはやネオリベリズムの経済システムに対する本質的な批判の根拠とはなり得ず、むしろ逆に、経済合理性をさらに促し正当化するための根拠 (養分) とみなされてしまう可能性すらある。たとえば、「労働場面における情動的資源の投入を欲している証拠だ」とか“短期的なキャリア形成や空間的移動にはつきものの不可避かつ必然的な現象にすぎない”といった形で。“不断の新たな関係性の更新を求めている立派な証拠だ”などという言い方もあり得るかもしれない。いずれにしても我々は、これまでのホネットによる対象関係論受容のあり方を改訂し、より一層、基底的なレベルに分け入ることで、説得力のある本質的な否定性の契機を新たに見出す必要に迫られているのである。

III 絶対的依存期における内的現実と否定性の契機

ホネットが否定性の契機を見出したのは、移行対象との情動的関わりが争点となる発達段階であった。ウィニコットないし対象関係論の文脈では〈相対的依存 (Relative Dependence)〉期に入って以降か、あるいはそれへの中間的移行段階に相当する。つまり、最早期の〈絶対的依存 (Absolute Dependence)〉と呼ばれる時期の課題を概ね正常に成し遂げて以降の段階を生きる、乳幼児の内的 - 外的現実との相互作用体験に焦点が当てられている。

翻って、筆者が今次問題視すべきと考えるのは、まさにその、かつてのホネットにおいては不問に付されたままであった〈絶対的依存期〉と呼ばれる段階に他ならない。つまり、前節の 2-1 に当たる精神構造の段階であり、その只中に潜在する危機こそが問題となるのである。以下ではまず、ウィニコットに加え、同時期に活躍し対象関係論の礎を築いたフェアバーンを補助線としつつ、この人生早期を生きる乳児と一次的準拠人格との原初的对象関係の内実に向きたい。

3-1. 欲求と関係性をめぐる未分化性：準拠人格の原初的没頭による「存在の連続性」の確保

共生的一体化や衝動欲求など、この時期は未分化性 - 無秩序性が様々な観点から指摘されるが、ウィニコットによると、乳児は〈身体〉と〈精神〉をめぐる分化も十分には果たしていない。つまり、身体的欲求とその満足を、精神的なそれと概念上分かつことがほとんど不可能であるという (Winnicott [1960a] 1965: 48=1977: 47 以下 TPIR と略記)。したがって、この時期において仮に何らかの精神的危機の状況を客観的に想定するならば、自動的にそれは、乳児の内部では身体的生活を脅かす危機とも通底していると想定されなければならない。

一方、準拠人格との関係性という点に目を向けると、共生的一体化を経験しているのは乳児だけではないことがわかる。乳児からは明確な〈対象〉としてではなく漠然とした非人称的〈環境〉として受け止められ、「一次的同一化 (primary identification)」が投げかけられる準拠人格の側もまた、「原初の母性的没頭 (primary maternal preoccupation)」と称される養育態度を通じて——「母親」としての自身の個別的アイデンティティを一方で維持しつつも——乳児の欲求に逐一共感し満たすことへと没頭する。つまり準拠人格もまた、高森淳一 (2000a: 101) の言うように、乳児に同一化——正確には、乳児と関わるなかで自身の中に現れる不安や衝動的感覚や願望の諸部分を乳児に投影し同一視することで、共感と対処を推し進めていく「投影同一化 (projective identification)」——を果たそうとしている。

ウィニコット自身の言うように、絶対的依存期における乳児は、確かに「ほとんどが防護の意味をもつ母親の育児について知る手立てさえもっていない。なされたことの何がよくて何がわるかったかを検討することはできず、単に利益を得るか障害を被るかの受身的立場にいるにすぎない」(TPIR 46=43)。しかし同時に、底流にあるそうした圧倒的な受動性の上で、乳児は何とかなして世界(環境)のなかで能動的に振舞える余地を模索し、能動的に参与しうる存在であることを自己確認し、そしてそこから魔術的とも言うべき創造性の感覚を獲得しようとする。衝動欲求の身体的表現はその足掛かりであり、ウィニコットによると「自発的身振りは活動中の本当の自己 (the True Self) をあらわしている。本当の自己だけが創造的 (creative) でありえるのであり、本当の自己だけが実在感をもてる (feel real) ののである」(Winnicott [1960b] 1965: 148=1977: 181-2 以下 ETFS と略記)。「理論的な局面 (Theoretical Position)」(ETFS 148=181) として認められるとあるように、この「本当の自己」という概念は、後で言及する「偽りの自己 (the False Self)」と呼ばれる病理的な自己の臨床的発見をもとに、その〈偽性〉との対比において理論的に導かれたものである。そうして導かれた自己のありよう、否、厳密に言うところ「本当の自己の起源 (the origin of the True Self)」(ETFS 148=181) のなかに、ウィニコットはまず「創造性」の源泉、すなわち、乳児特有の感覚的な幻想可能性の源泉を見出す。それは、自らが要求した通りに動いてくれた世界(環境)をさも自ら創造した結果物かのように錯覚することを可能とする。前節の 2-4 にあるように、ホネットもこの「錯覚」について触れているが、単にそれは世界(環境)との一体性・未分化性に甘んじて身を委ねられるという意味での万能感覚だけでなく、自身がその環境を創造しているのだという能動的な実感のモメント

をも指示するものである⁴⁾。

加えて、本当の自己の起源は「実在感」、厳密に言うところ「存在の連続性」を担保するものでもあるという。ウィニコット曰く、「個体の早期の発達における健康とは、存在することの連続性 (continuity of being) を必然的に伴っている」(Winnicott [1954] 1958: 245=2005: 297 以下 MRPS と略記)。それは前述のように、身体的な意味での安全と精神的な意味でのそれとが、今後も引き続き保障されるだろうといった漠然とした期待とでも言うべきものであるが、それは「ほど良い (good-enough) 養育ないし環境」の結果でもあり同時に、乳児の「生得的な潜在力 (The Inherited Potential)」(TPIR 43=40) による発生的な感覚と呼ぶべきものでもある。

3-2. 創造性と早期自我機能による漸次的発達: 情動面での分離-統合 (アンビバレンス獲得) を通じた認知的発達

こうして乳児は、創造性と存在の連続性の基礎を整えつつ、ホネットが力点を置く相対的依存の段階へと漸次移行していく。つまり、衝動の一部は欲動という組織化された欲求の形態へと徐々に変容し、創造性に象徴される能動的モメントは〈環境〉としてではなく徐々に〈対象〉としての準拠人格へと向けられ、積み重ねられた記憶心象を頼りに「内的対象」という形で表象していくことが可能となる。

この最早期における漸次的移行について、ウィニコットは次のように述べている。

最早期におけるほど良い環境の提供によって、乳児が存在しはじめることが可能になり、体験をもち、個人的な自我 (a personal ego) を確立し、本能を御し (to ride instincts)、そして生きることに固有のあらゆる困難に出会うこともできるようになる。(Winnicott [1956] 1958: 304=2005: 371 以下 PMP と略記)

注目すべきは「自我」の発生的位置づけである。ウィニコットによると、自我は衝動段階での本能欲求との緊張関係のなかで確立される。そして、無秩序な〈衝動〉を制御し、自らの奉仕下に集約する (TPIR 40=36)。こうして〈欲動〉形態への変換は、この早期に確立された自我の制御機能によって初めて可能となる。

さらに別の箇所では、ウィニコットは「自我ができるまでイドはない」(Winnicott [1962] 1965: 56=1977: 57 以下 EICD と略記) とまで断言している。彼にとって自我とは、「適切な状態のもとで統合されて成長する人格のなかの一単位となる、その部分を記述する」(EICD 56=57) 概念であるが、領域概念としてよりも専ら機能概念とし

て定義される自我こそが、ウィニコットにおいては人間の精神生活の出発点に位置づけられており——「自我がはじまったときが最初である」(EICD 56=58)——，その潜在的機能が本格的に花開くことによって、初めてその制御下に置かれる衝動欲求の貯留地が「イド」と呼ばれるに足る領域概念としての存在意義を得るというのである。したがって、「人間の子どもの情緒発達の非常に早期での自我機能は、一個の人間としての幼児の存在と概念から峻別できない概念と考える必要がある」(EICD 56=57)。

高森 (2000a: 102) の言うように、この人生早期において満たされるべき欲求とは、イドに由来する衝動欲求というよりもむしろ「自我の欲求」と呼ぶべきかもしれない。仮にそうなると、先述した「本当の自己の起源」もまた、早期の機能的に発生した自我との関わりで捉えるべきとなる。ウィニコット曰く、早期のほど良い養育を通じて「幼児の弱い自我にも強さ (the strength) が与えられる。こうしたことを通じて、本当の自己も自らの生活をもちはじめのわけである」(ETFS 145=177)。自我そのものの存在 (実在) というよりも、それが持ちうる制御機能上の「強さ」が、本当の自己の起源と捉えられているのである。

一方で「自己」はいかに定義されているのか。ウィニコットによると、「自我とは異なっていて、成熟へと進んでいく道筋を基にした全体性を持つ、私であり、私ではない人のこと」(Winnicott [1972] 1989: 271=1999: 35) であり、「子どもが、他人は何を見、感じ、そして聞くか、そしてこの幼児の身体に直面したときどんなことを考えるかといったことを知的活動 (the intellect) を用いて見はじめたあとになってあらわれてくるもの」(EICD 56=57-8) と定義される。ホネットが欲動の組織化の段階において指摘する「認知的はたらきの組織化」と、それによる他者の道徳的視座の内面化といった、個人のより成熟したあり方がここに端的に示されている。

ただし、知的 - 認知的活動の組織化=使用可能性と言っても、早期対象関係論の観点では、それらもまた情動面での発達との関連性のなかで捉えられる。「情緒発達における達成としての抑うつポジション」(Winnicott [1955] 1958: 262=2005: 312 以下 DNED と略記) という表現が、そのことを端的に示している。

「抑うつポジション (depressive position)」とは、相対的依存期への移行～初期段階に相当する、情動発達をめぐる内的布置 (constellation) のあり方の一つを示す概念であり、もう一つの「妄想 - 分裂ポジション (paranoid-schizoid position)」がそれに先行すると考えられている。これらの概念を提唱した M. クラインによると、「母親」という全体的な〈対象 (人格)〉として未だ

認知できない出生直後の乳児は、漠とした〈環境〉と密に触れ合うツールとしての「乳房」という部分対象、あるいは「授乳」という行為との間でとりわけ密に身体接触を経験するなかで、満足を与える乳房から「良い部分対象」という内的幻想を徐々に形成し、反対に欲求不満をもたらす乳房からは「悪い部分対象」を内的に形成してゆく。いずれも (満足を与えてくれたことへの) 愛と (欲求不満がもたらされたことへの) 怒りを投影したうえで同一化の過程であるが、初めのうち乳児はそれらを同一個人に発するものとは理解することができない。妄想 - 分裂ポジション、すなわち、絶対的依存期において「良い/悪い」あるいは「愛/憎しみ」といった観念は、未だ相互に関連付けて捉えられていないため、専ら個人内部における自己本位的な欲求充足と生存確保のための幻想的指標——良い部分対象を妄想的に肥大化し、悪い部分対象を妄想的に否認する——としてのみ機能し、外的規範へと訴える道徳的指標にまでは未だ十分には熟していない。

双方が内的に「統合」されるためには、一方の良い部分対象との間で築かれる基本的信頼——ウィニコットの文脈ではほど良い養育を経た存在の連続性——の恒常的確保に見通しがつき、さらには、より広範な身体接触——ウィニコットの表現では「状況を [丸ごと] 抱える (holds a situation)」(DNED 263=313) 環境としての準拠人格の存在——経験による対象認知が次第に向上していく必要がある。それらによって乳児は、悪い部分対象に対し、不快や欲求不満の自律的訴えとして具体的な攻撃的振る舞いを差し向けつつも、その攻撃性が良い部分対象でもあった同一個人に向けられたものであったため傷つけてしまったのではないかという罪悪感、抑うつ、あるいは失ってしまうのではないかという喪失感に駆られることとなる。だがそうした葛藤のなかでも、環境としての母親の側が変わらず平穏と「生き残ること (survival)」(DNED 267=320) ができれば、乳児は傷つけた対象への修復と償いに努めることで、自身の罪悪感や抑うつを徹底操作しようと努力することが可能となるという。こうして個人は「良い/悪い」「愛/憎しみ」といった観念を「情動的アンビバレンス」という統合された形で意識的に吟味し始めると同時に、準拠人格を独立した全体的対象として認知し、かつ、その重要な他者との間の攻撃性と葛藤に満ちた情動的やり取りを通じて、外的規範へと訴える道徳的指標へと成熟させることが可能となっていくのである。

3-3. 絶対的依存期における精神的危機①: 侵襲的感覚に伴う「絶滅の脅威」

フェアベーンは、こうした抑うつポジションへの移行

とそのなかで発現する葛藤的課題を、フロイトの精神性的発達段階仮説から「口唇期」の概念を借用し、より動的に描写している。彼によると、抑うつポジションは後期口唇期に相当し、歯が生えて乳房を噛むことができる段階で生じる「吸うべきか、それとも噛むべきか (to suck or to bite)」(Fairbairn [1941] 1952: 49=1992: 111) という葛藤を乗り越えることが課題となる。その心理的に意味するところは、対象を「愛したままでいるべきか、それとも憎しみの表現として攻撃するべきか」という葛藤であり、情動的アンビバレンスを外的な訴えのための指標として受容しつつある乳児は、不快や欲求不満を「噛む」という直接的な攻撃手段を通じて表現することができ、また実際にやってのける。前述のように、そこで母親が平静と生き残り、後続の「吸う」という欲求にも再度ためらうことなく応じることができれば、乳児はこの時期を「思いやりの段階 (the Stage of Concern)」(DNED 264=316) として享受し、自らの憎しみを過度に危険視する心配はなくなる。しかしながら、母親が平静さを保つことができず、敵意をもって暴力的に対抗したり、あるいはうまく「生き残る＝関わり続ける」ことなくすっきり授乳に象徴される接触行為から離れ去ったりすると、乳児は「自らの憎しみが、母親の優しい愛情 (=乳房) をすっかり破壊してしまった」という観念に囚われたままとなってしまう (Fairbairn [1940] 1952: 25=1992: 65)。こうして喪失感や抑うつが処理されぬまま残り続け、自らの憎しみを過度に危険視し、結果として理想化されたままの良い (部分) 対象へのリビドー (対象希求欲求) の備給⁹へと防衛的に終始せざるを得なくなる。これが、分離不安の病的形態たる、かつての共生的一体化に向けた暴力的な融合願望へと連なっていく。

では、もう一方の妄想 - 分裂ポジション、すなわち、絶対的依存期における葛藤的課題と潜在する危機的観念は、一体いかなるものであるのか。フェアベーンによると、それらはより一層深刻なものである。そこでは、歯が生え始める前の前期口唇期に相当するため、「噛む (べきか)」という選択がそもそも取れない。したがって、発現する葛藤は「吸うべきか、それとも吸うべきでないか (to suck or not to suck)」(Fairbairn [1941] 1952: 49=1992: 111) という形をとるといふ。その心理的に意味するところは、対象を「愛したままで良いか、それとも愛することをやめるべきか」というものである。

既述のように、この「前アンビバレンス (Pre-Ambivalent)」(Fairbairn [1941] 1952: 39=1992: 91) の段階では、不快や悪い部分対象といった内的表象は専ら自らの生存確保に向けた内的指標としてのみ働きうるため、感じられる不快を直接的表現として外部に訴え、世界 (環境) を動かすほどの原動力にまでは熟していない。

そのため乳児は、不快や欲求不満 (=悪い乳房) に直面した際、そこから「身を引き離す」という選択しか取れなくなる。それはフェアベーンの言うように、「(環境) としての外的対象を志向し始めていたりリビドー (対象希求欲求) の全面撤退を意味し、生理学的には自らの身体的生存を賭した危険な選択であることを意味する。そして不幸なことに、この葛藤的課題がうまく乗り越えられないような状況が続いた場合、乳児は自身の憎しみではなく「愛情を悪いものだと感じてしまう」(Fairbairn [1940] 1952: 25=1992: 66)。つまり、「自分の愛情は危険すぎてとても自分の対象に振り向けられるようなものではない」(Fairbairn [1940] 1952: 26=1992: 67) という観念に囚われたままとなってしまうのである。

厳密に言うと、ここで話題となる「愛情」は、規範性を帯びた明確な対象志向的な情動ではなく、それ以前の、ただ単にこの世界に存在することを欲する、衝動レベルでの存在欲求を意味している。したがって「自分の愛情が悪いものであり危険」という観念は「自分がこの世界に存在すること自体が悪く危険」という意味であり、たちまちそれは、ウィニコットの言う「絶滅の脅威 (a threat of annihilation)」を精神的危機として、言い換えれば、「本当の原初的不安 (a very real primitive anxiety)」(PMP 303=370) として生み出すこととなる。

絶滅の脅威とその原初的不安とは、“Going to pieces” (バラバラに崩壊する)、“Falling for ever” (奈落に落ちる)、“Having no relationship to the body” (身体感覚の喪失、魂が抜ける)、“Having no orientation” (寄る辺がない、途方に暮れる) などと表現される「想像を絶するほどの不安 (the brink of unthinkable anxiety)」(EICD 57=59) であり、乳児の「“存在し続けること (going on being)” を妨げ」るほどの「母性の失敗 (Maternal failures)」(PMP 303=370) と、それによる「侵襲 (impingement)」の感覚に伴って生じる。つまり、「環境が胎児 (あるいは乳児) に侵襲し、そして一連の個人的体験の代わりに一連の侵襲に対する反応 (a series of reactions to impingement) が」(Winnicott [1950] 1958: 211=2005: 252 以下 ARED と略記) 余儀なくされる事態である。ここで「侵襲 “に対する反応” とわざわざ記されているように、ウィニコットによると、この「反応すること」が過度に要請される事態こそが問題であるという。それは、生得的な潜在力を元手に創造性と実在感を自ら獲得し、(幻想的とはいえ) 自発的な存在の連続性を確認しようとする健康な状態とは、まさしく正反対の事態である。ウィニコット曰く、「ここで存在に代わるものは反応である。反応することは存在を中断し破滅を招くことになる」(TPIR 47=45)。

もっとも、そうした (過度な) 反応という様態は、後

述する自我の防衛戦略と軌を一にする、いわゆる“二次的な”慣習的行為様式とも考えられなくはない。つまり、(環境)との幸福な共生的一体化をまだまだ体験すべきだったにもかかわらず、強引にその理想郷から引き剥がされることにより、急場凌ぎで環境との分化、すなわち(対象)としての認知的関わりの様式を構想せざるを得なくなった結果としての「反動的自我」とでも呼ぶべきものである。ウィニコットは一貫してこの侵襲“に対する(外的)反応”という二次的な行為様式に力点を置いてはいるが、一方で、この「侵襲」と表現される“一次的な”経験的-感覚的リアリティをより精密に吟味すると、客観的に見て“外から”襲い掛かるものと理解されがちだが、主観的にはむしろ、母子一体という共生的ユニットの“内から”発せられ充満していくものとして、乳児には体験されているのではないかと考えられる。「自/他」ないし「内/外」の分化以前の世界を生きる乳児にとって、少なくとも一次的には「外」という観念は存在しない。したがって、絶滅の脅威とその不安は、自らが存在すること、あるいは存在を欲することへの危険視とも通底していることから、「紛れもなく自身の内側から発せられ、自身と世界(環境)もろとも破滅させかねない脅威」として体験されているものと考えられよう。後述のように、自我が衝動欲求のエネルギーを処理し切れず、屈服せざるを得ない事態ともこの点は深く関わっている。

では、ウィニコットの言う「母性の失敗」とは、具体的にいかなる養育上の失敗を指示しているのか。一見、抑うつポジションと同様に、あからさまな敵意の表明や授乳行為からの一切の離脱などが真っ先に想定されるかもしれない。だがウィニコットによると、侵襲と絶滅の脅威をもたらさうる失敗は、そうした客観的にも容易に同定可能であるような類の剥奪(外傷)行為だけとは限らないという。

本能満足と対象関係それ自体が個人独自の生存に対して脅威となることもある。たとえば、赤ん坊はおっぱいを吸って満足を得る。この事実それ自体から彼が自我親和的なイド体験をしているのか、それと反対に自我の連続性に対する脅威、自我がまだ対処できるまでには至っていないで自我親和的とはなりきれないイド満足による脅威となる誘惑(seduction)という外傷を被っているのかわからないのである。(TPIR 47=45)

このように、「授乳」という経験それ自体が、乳児にとって脅威の根源となりうる場合さえあるという。それは、(本当の)自我がイニシアティブを取って漸次的に創造性と実在感を獲得するという課題を内部から脅かすよう

な、「授乳に伴う」イド(衝動)領域からの過度な突き上げ、言い換えれば過度な興奮の惹起と言うべき事態である。ホネットも関心を寄せるスピッツは、「最初の過保護」と題して「子供に哺乳ビンや乳房を、なんらかの不快感があるときに与える傾向がある」(Spitz 1960=1965: 111)母親を、精神毒素的要因の一例として観察記述している。

あるいはまたスピッツは、「最初の露骨な受動的拒否」と題して、16歳の母親が、授乳の際に乳児を「生きている存在」のように扱わず、まるで一つの品物のように扱い、堅く緊張した様子で接する場面も観察している(Spitz 1960=1965: 104-5)。母親のこうした態度は5日間続き、乳児は前昏睡の痴呆に陥った⁶⁾。

いずれのケースにおいてもスピッツは、我が子に対する無意識的な敵意や拒絶を背後に読み取ってはいるが、重要なのはそうした敵意や拒絶が紛れもない「授乳」という行為に多かれ少なかれ反映され、それによって、「物質的充足を通じた脅威」という形で乳児のなかで観念付けられてしまうという甚だ逆説的な事態である。こうして自らの愛(=存在欲求)が悪く危険であるだけでなく、「環境から与えられる愛」もまた、それが自らの衝動欲求を(過度に)満たし刺激するものであるという点で、同様に悪く危険なものとして捉えられてしまうのである(cf. Fairbairn [1940] 1952: 26=1992: 67)。

3-4. 絶対的依存期における精神的危機②: 防衛戦略としての「偽りの自我-自己」の形成と「道徳的防衛」

自らの愛(=存在欲求)自体を危険視し、また環境からの愛(=欲求充足)をも危険視せざるを得ない乳児は、抑うつポジションの時のように、理想化された良い部分対象へのリビドー備給へと防衛的に打ち込むわけにはいかない。彼には、引きこもるべき“かつての幸福な”共生状態もその記憶イメージも——今まさに共生状態のなかを生きているわけであるから——持ち合わせてはいないし、またそもそも、過度の興奮の駆り立てに象徴される衝動欲求の激烈さを前に、未だ脆弱なままの自我構造は圧迫されそれを制御できないため(TPIR 40=37)、特定の対象を志向する欲動形態へと変換することができないままであるからである。

かくして追い込まれた自我は究極の防衛戦略をとらざるを得なくなる。すなわち「分裂(split / schizoid)」である。

対象と関係をもつという面からみると、幼児は人格の“分裂(split)”をつくりだしているのである。人格の分裂した一方の片割れはそこに存在する対象と関係をもつわけだが、そこにはわたくしが偽りのまたは外界服従的自己(a false

or compliant self) と呼ぶものが発達してくる。また、分裂したもうひとつの片割れは、主観的な対象、つまり身体的体験から生じた現象と関係をもつが、これは客観的に知覚された世界に影響を被ることはほとんどない。… [中略] … 偽りの自己から生じる外界との交流には実在感を伴わない。自己の中核すなわち本当の自己とよべるような自己が関与していないために、それは真の交流ではないのである。 (Winnicott [1963] 1965: 183-4=1977: 223-4)

ここでは「自己」レベルでの「本当/偽り」の分裂的生成過程が語られているが、それは、基底にある「自我」単位での分裂、すなわち「偽りの自我の強さ (a false ego-strength)」(PMP 297=360) に起因している。偽りの自我の強さは、人格の中核となるべきだった部分を、対処を期待されていたイド領域もとも切り離し、覆い隠す。そうして「個人」は、中心核の延長としてよりも外殻 (the shell) の延長として、そして侵襲する環境の延長として発達する」(ARED 212=252)。既述のような反動的自我とでも呼ぶべき形態は、失敗に満ちた環境に何とか適応しようとするといった試みだけでなく、そうした服従的实践を繰り返しながら、自らの (衝動に根差した) 欲求の在り方、現れ方自体をも歪曲する —— 欲求不満や過剰充足といった不快な観念自体をなかつたことにする—— ことで身体的および心理的生存を何とか維持していくための、自我の最後にして究極的な生存戦略と言える。

偽りの自我を外殼的に形成せざるを得なくなった個人は、それを土台としながら漸次発達を遂げていく。つまり「偽りの自己」と呼ぶべき形にまで生成を遂げる。ウィニコット (EICD 58-9=60-1; ETFS 142-3=174-5) によると、後年に確認可能な偽りの自己の組織化とその発現は広大なスペクトラムを成しており、病的な状態 —— 深刻なシゾイドパーソナリティ、幼児統合失調症、幼児自閉症、潜在性統合失調症など —— のみならず、健康な場合 —— 「上品で礼儀正しい社交的態度のもつ全機構」(ETFS 143=175) を含む —— でも見られるという。加えて、偽りの自己は「知性化の傾向 (the intellectual approach)」(ETFS 144=175) とも稀ならず結びつきが見られるという。それは、分裂の際に正当な身体的および心理的な存在欲求を強引に切り離したことで招聘された(こちらもまた防衛的な)「知性の早熟化」(高森 2000a: 106) によるものである。前述のように、認知的働きを含む知性全般の組織化=使用可能性こそが自己の成熟の指針ではあるけれども、偽りの自己においては、その早熟さこそが、身体-心理的存在との「解離」を背景としている点で問題となるのである。

だがウィニコットの言うように、偽りの自己による外

界の交流には、本当の自己ではないため実在感が伴わない。そのため、「偽りの自己は、都合よく社会親和的であるかもしれないが、本当の自己の欠如が不安定さをもたらし、その不安定さがより明らかになれば、一層社会が欺かれて、偽りの自己が本当の自己であると考えられるようになる」(ARED 212=253)。そうした実在感をめぐる不安定さは、ただ「不毛感 (a sense of futility)」(ARED 212=253) という微かな訴えとして顔を出すに過ぎない。つまり当人自身は、自らの拠って立つ自己が「偽物である」とはとても理解することができないのである。

そしてそれは、早期の母性的失敗に関しても当てはまる。3-1 でも述べたように、乳児は何(誰)がどう悪かったのか知る手立てはなく、本当の自己(の起源=自我の強さ)の凍結によって、そうした理解不能な状態は後年まで引き続く。しかもあろうことか、「根本的には偽りの筋道を辿る中で、個体は本来自分に責任がないこの悪い環境に、責任を感じたりする」(MRPS 248=301-2)。というも「この悪い環境については、彼が(もし知っているなら)世界に責任を負わせることが正当であつたろうが、それはその個体の精神-身体が憎んだり愛したりできるように十分組織される前に、その悪い環境が彼の生得的な発達過程の連続性を掻き乱したからである。これらの環境の失敗を憎むかわりに、この個体がそれによって解体したのは、その過程が憎むこと以前に存在していたからである」(MRPS 248=302)。

繰り返すように、前アンビバレンス段階にある乳児は、(対象)を憎み実際に攻撃するという発想も手段もそもそも取り得ない。つまり、不快を伴う悪い部分対象を内面化するその対価として、その不快と悪の出所を同定し具体的な攻撃を展開するといった「正当な」意味での防衛手段に訴えることができない。そこで乳児は、本来は環境(世界)の側が受け持つべきであつた悪(=責任)を、あろうことか自ら受け持とうとする。つまり、自分が悪かつたのだから不快を引き受けるのは当然であり、環境(世界)の側には一切の責任はない、という発想を取ろうとする。

一見、この発想は絶望の上塗りにしか見えない。だがフェアベーンの言うように、こちらもまた究極的な状況下で編み出された防衛戦略なのである。では、彼はいかなる事態に陥らないよう我が身を防衛しようとしているのか。それは、自身がただこの世界に存在すること、あるいは存在しようと欲すること自体が許されないといった「『無条件的な』悪 ('unconditional' badness)」(Fairbairn [1943] 1952: 66=1992: 143) からの防衛である。前述のように、絶滅の脅威は、自分がこの世界に存在すること自体が悪く危険であるという観念に起因するものである。とはいえ彼は、それでもなお生きて行か

ざるを得ない。存在の連続性を著しく毀損されたいうえでなお、生きて行かざるを得ないのである⁷⁾。そこで彼は、「無条件的な悪であるよりも条件的な悪 (conditional badness) である方が好ましい」(Fairbairn [1943] 1952: 66=1992: 144) という結論に至る。つまり、「自分が悪いことには変わらないが、それは、何か一般に認められる道徳ないし規範を(知らぬうちに)犯したような形で悪を引き受けざるを得なくなったからこそ、私は悪いのだ」という発想への転換である。これによって、主観的には自身が存在する余地はかろうじて保たれる。そして客観的にも、——環境(世界)から愛されることもまた危険視されていたため——「条件的な悪」として引き続き悪くあることによって、環境からの関わりを全て「憎しみによるものだ」と解釈することが可能となる。自分が良い存在であるために、あるいは厳密には、ただ存在しようとするがために、それを愛される、あるいは厳密には、存在を積極的に承認されるという事態は最も避けなければならない。条件的か無条件的かを問わず「善」であることは、いずれにしても自身と世界とをもちとも破滅へと導くからである。

フェアベーンが一連の発想の転換を「道徳的防衛 (moral defence)」(Fairbairn [1943] 1952: 65=1992: 142) と名付けるのは、環境(世界)の側の責任を迫及できるような道徳的正当性を自ら獲得するという意味ではなく、むしろ真逆であり、自らが進んで条件的な悪となるべく、環境(世界)の側に自らを断罪することが可能な道徳的な根拠(=道義)を与えるという意味からである。言い換えれば、条件的な悪とは「道徳的視点から見て悪い (bad from a moral standpoint)」(Fairbairn [1943] 1952: 66=1992: 144) 存在となることを意味する。それは繰り返すように、無条件的な悪、すなわち、ただ単にこの世に存在しようとするという意味での「リビドー的視点から見て悪い (bad from a libidinal standpoint)」(Fairbairn [1943] 1952: 66=1992: 144) という状態(観念)から死に物狂いで距離を取るための、歴とした防衛戦略なのである。

IV 絶対的依存期における危機=否定性の契機を通じた 物象化 - 本源的承認論の再構成

ここまでで明らかのように、絶対的依存期における乳児と一次的準拠人格との間主観的経験、ならびにそのなかに潜在する危機は、ホネットの物象化 - 本源的承認論が目指した議論の水準と多くの点で符号している。人生早期に必要なとされる欲求充足は、身体的生存と心理的生存とが未分化ななかで求められる、この世界にただ存在し続けることへの承認、すなわち、実存的な関わりに支えられた包括的な存在の承認であり、情動的アンビバレ

ンスが獲得される以前の、すなわち、規範性を帯びた情動(ないし情動の個々の規範性)が争点となる以前の欲求である。これらの点は、ホネットによる本源的承認の定義と基本的には合致している。

とはいえ、ウィニコットならびにフェアベーンによる対象関係論の観点から見ると、ホネットの議論には根本的に修正すべきと思われる点も多くある。以下ではその点を指摘しながら、今次要請されるべき批判的社会理論として、物象化 - 本源的承認論をいかに再構成すべきかを論じていきたい。

4-1. 身体的脅威となるネオリベラリズム: 脅威としての 物質的欲求充足に打ち克つためのさらなる物質的 欲求充足

既述のようにホネットの言う物象化は、筆者の見るところ、経済システムとしてのみならず、信念体系としても我々を圧迫するネオリベラリズムに起因する事象と捉えられている。つまり、原初的対象関係論の観点からすると、ネオリベラリズムは我々の身体的生存をも脅かすものとして、今一度理解されねばならないということになる。

ただし、その脅威が体験されるあり方は必ずしも直接的である必要はない。ホネット (E 177-8) は最終的に、物象化のケースとして戦争での敵を絶滅させる行為やホロコーストのような大量殺戮を挙げるに至っているが、それらは本人も言うように、社会的な生活世界全体を見渡してもむしろありそうにない「社会性のゼロ地点における例外的ケース」(E 178) と言わざるを得ない。ネオリベラリズム的変革後久しい社会を生きる我々にとっては、そうした直接的な脅威である必要はもはやなく、精神面での脅威、しかも、ごくありふれた客観的には全く脅威と呼べないような体験であっても、身体的生存を揺るがすほどの、我々の存在それ自体を十分に脅かすものとなり得る。たとえそれが従来のような承認形式、すなわち、愛による承認であっても、甚だ逆説的ながら主観的には脅威となりうるのだ。

ホネット自身が明らかにしたように、従来の承認領域は、ネオリベラリズム的変革下ではもはや批判的潜勢力を喪失し、空転化してしまっている。否、それ以上に、イデオロギーと化すことでシステムおよび信念体系としてのネオリベラリズムと共振し、それを強化してしまっただけである。(ロマン主義的) 愛の理念も例外ではなく、かつては資本主義経済システムによる道具化の圧力に対し防波堤として機能していた親密な関係領域は、今やネオリベラリズム的脱領域型労働による圧力の下では、時間という資源への要求や短期的な社会移動への期待が一層投げかけられ、かつ、利益志向型で企業家的な精神が

細部にまで浸透してしまっている (PdK 275)。それによって、生活世界における (ロマン主義的) 愛という情動規範的な承認は、生活世界という枠組みを容易に通り返し、現行の経済システムへのさらなる適応ないし服従を迫るメタ・メッセージとして機能してしまうのである。そしてそれは、絶対的依存期での危機を抱えたままの個人にとって環境 (世界) から与えられる愛が悪く危険なものであるように、経済システムへのさらなる適応や服従を通じた「絶滅」という最悪の結果をもたらしかねない経験として、我々に襲い掛かるのである。

とはいえ我々は、再び生活世界の中に安住できる空間を探り当て、そこに一時的であれ引きこもろうとするわけにもいかない。相対的依存期での危機と違って、絶対的依存期での危機を抱えた個人は、3-4 で述べたように、引きこもることを許す“かつての幸福な”共生状態もその記憶心象も、そもそも持ち合わせてはいないからである。

この点でもまた、ホネットの物象化論は修正を余儀なくされる。彼は物象化を、本源的承認の「忘却＝記憶喪失」の現れと定義しているが、(先ほどの極端な例示とは裏腹に) この定義では、物象化の克服に向けて利用可能なほどには本源的承認を体得してきたことが前提となっている。何よりもそれは、物象化もまた元を辿れば本源的承認によって産出された態度である、という理解に現れている。一方では彼は、「本源的承認」という従来の承認論とは一線を画す基底次元に立ち入っておきながら、他方の「物象化」という問題事象の把握においては、従来の枠組みでの理解に相変わらず留まったままである。つまり彼は、あくまで記憶心象のレベルでの忘却が問題であってそれを思い出させることで克服は可能とする理解を超えておらず、(衝動) 段階での欲求が概ね“健全に”満たされてきたことに変わりはなく、そうした“健全な”範囲内で引き続き放出されるエネルギーを誤って養分とした結果としての一過の態度にすぎないといった安直な理解に、依然として留まったままなのである。

〈衝動〉欲求の段階、すなわち、共生的一体化の段階における根本的な危機を抱えたままの我々は、暴力的な融合願望にすら頼ることはできず、ただただ、経済システムに曝され続けたまま生きていかざるを得ない。つまり、絶滅の脅威と真向いで生きていかざるを得ないのだ。確かに我々は、日々の生産 - 消費活動を通じて、様々な場面で物質的な欲求を醸成しつつそれを逐一満たしていく。とはいえ、それが存在論的な安心・安定まで担保することはなく、絶対的依存期における乳児にとって授乳自体が脅威と受け止められることもあるように、時に不均衡なほどに経験される過剰な物質的充足は、かえって無秩序な衝動欲求を刺激し暴走を促すこととなり、枯渇への

恐怖と、それに打ち克つべくさらなる物質的充足の場をそこかしこに開拓せねばならないといった強迫観念をより一層強く生み出してしまうのだ。

4-2. 「偽りの自我 - 自己」の土俵上で展開される「ほんもの」の生き方の追求: ポストモダンの自己の真相

ホネットの言うポストモダンの自己は、かかる一連の原初的不安に根を持った物質的欲求充足に伴う侵襲的な感覚と、さらなる欲求充足の場を求めることでそれを何とか抑え込もうといった逆説的で悪循環な強迫観念とを、「知性」あるいは「理性」の仮面を纏って正当化すべく開発された、それ自体「偽り」の理想像と考えるべきであろう。

ポストモダンの自己は、単に多様な社会的要請に対応できる多元的な自己の形成のみを目標とするわけではない。ホネット (PdK 253-4) の言うようにそれは、自己の多元化の過程でありつつも、生涯に亘って「ほんもの」と考えられる生き方や個性を模索しようといった実験的自己実現の過程でもある。ホネットはこの自己実現をめぐる再帰的な運動を、戦後から社会民主主義時代にかけて個人主義の理念の下に勃興した、職業上や家庭内での各役割を単に引き受けるという既定路線からの解放を目指す規範的潜勢力として捉えているが、そうした近代的要請からの脱却という初発の目的を完遂した今、「ほんもの」志向の生き方や個性の追求は——それ自体が自己目的化し展開・維持される段階をも超えて——新たな理念と必要性によってさらに強固に下支えされる段階に移っている。つまり、現状での欲求充足に留まることができず、さらなる充足の場を求め続けねばならない我々の強迫観念を、この再帰的な自己実現という理念が、“ほんもの”の生き方を追求しようとしている優れた実践例である”と解釈し正当化することが推し進められる段階へと突入しているのである。

無論、そのような解釈自体、欺瞞的である。それは、自身の欲求の在り方や現れ方の意味を、全き「欲求」の次元で吟味することを拒絶し、解釈と体験の両枠組みから丸々切り離そうとする、偽りの自我のみが為せる業である。つまり、現代における「ほんもの」志向の生き方や個性の追求は、全て「偽りの自我」という土俵上で展開されているにすぎないのである。それは、存在の連続性に支えられた「本物の自我 - 自己」とは全く異質のまがい物である。

ところが厄介なのは、偽りの自我が「偽りの自己」へと生成してゆくにしたがって知性化の傾向をより一層防衛的に強めていくように、上記のような正当化言説が容易に知性と結びつきうる、あるいは知性として受容されやすいという事実である。それは、移行対象を介した情

動的やり取りに端を発し、(母親を個別の一人格として認めざるを得なくなって以降の)世界に対する漠然とした基本的信頼を引き連れつつ展開される、芸術や宗教といった文化的客体化の領域にも容易に侵食し、さらにラカン派社会学の観点から檜村愛子(2009, 2017)が指摘するように、倫理的審級の役割を担っていた大文字の他者とその幻想性(S1)が力を失ったまま、主体にとっての知(S2)がその機能をも代替するといった、現代における権力-知ユニットの圧迫状況とも密接に関係している。ウィニコットによる「自己」概念の定義にあるように、知性の組織化と使用可能性は、確かに自己そのものの成熟の証でもある。だが現代においては、その定義に込められている前提条件、すなわち、身体的欲求にまで食い込むほどの他者への実存的関心と信頼に下支えされたうえで組織化されるものであるという前提はすっかり漂白され、それによって我々は、現代における知の圧迫状況に対する批判的視点を根本的に持ちえない状態となっている。ホネットが物象化を、認識的遂行の一形式でありながら認識的内省にもはや訴えかけることが不可能な態度と捉えるのと同様に、偽りの自己はすぐれて知的でありながら、その欺瞞性を同じく知的に暴き出し内省を促すことが極めて困難なのである。そうこうしている間に、偽りの知性はいつしか現代を象徴する「世界の新たな理性」(Dardot, P. et Laval, C. 2009=2013)にまで上り詰め、その規範性と権威性をますます確固たるものとしてゆく――。

ところでホネットにおいては、こうしたポストモダンの自己の(知的)欺瞞性を明らみにできる理論的体制がそもそも整えられていたのだろうか。筆者の見限り、十分ではない。それは「自我」の位置づけを見ればよくわかる。彼はIIで述べたように、精神内の多元化=ポストモダンの自己への生成過程を主題化するにあたって、自我を、人格的な「統合」の働きを象徴するものであるという理由から後景へと退けている。基本的な自我機能は、2-4にあるように、〈欲動〉が組織化された“後”に、そのエネルギーが分化された“成果物”として、初めて組織化されるものと考えられているのである。もはや自我は、超自我と共に、精神内部において何らかの特別な地位も機能も付与されていないに等しい。

しかしながら、こうした後天的で貧しい自我観のままでは、ポストモダンの自己の欺瞞性、すなわち、「偽りの自我」という土俵の上で展開されているに過ぎない点を十全に暴くことができない。ホネットは、「アイデンティティ」や「自己」という概念を通じた精神の多元化過程の純粋な「解明」に力点を置きすぎるあまり、そしてまた、その「多元化」という性質との対比において自我概念の働きを過度に矮小化して捉えるあまりに、人格的統

合とは別の機能、とりわけ、危機的状況のなかでの「分裂」という原初的な防衛のモメントを理論上排斥せざるを得なくなっているのである。ウィニコット(ならびにフェアベーンもそうだが)の言うように、自我は人生早期から存在しており、衝動欲求との緊張関係のなかで、その後の基本的な人格構造を決定づけるほどの極めて重大な決断、すなわち、「本当の自我」であり続けるのか、はたまた「偽りの自我」であろうとするのかといった決断を下しているのだ。あえて「統合」という機能を位置付けるならば、それは、かかる最初の究極的な選択が行われたうえで、いずれかの道を〈自我〉ないし〈人格〉レベルでの存在論的な基本方針としていく作業を指示するものであるべきであって、後年のホネットの言う〈自己〉レベルでの多元化とはそもそも位相の異なる話であり、したがってこれらは矛盾も対立もしないのである⁸⁾。

4-3. 「条件的な悪」を防衛手段としてとり続けることによる社会批判と連帯の困難さ: すずんで免責される社会

最後に、偽りの自我・自己を土台とする個人は、さらに道徳的防衛という魔術的な発想をとる。つまり、ただこの世界に存在しようと欲することが悪く危険であるために、そうした無条件的な悪から我が身を防衛すべく、条件的な悪、すなわち、道徳的視点から見て悪い存在であろうと必死に努力する。これもまた、ネオリベリズムに侵食されることで植え付けられた我々の慣習的思考回路を指示するものではないかと考えられる。

とりわけそれは、「個人化」や「自己責任」に象徴される過酷な分断的思想を前に、それらを半ば運命的な形で引き受けるしかないと考える我々の思考を反映している。「ほんもの」の生き方を志向する我々は、その再帰的な自己の追求を「自由」の理念の下に推し進めつつ、他方ではリスクや失敗を個人の責任として引き取らざるを得ないと考えている。社会の再生産は、こうした「個人」単位での自己アイデンティティの更新ならびに多元化を通じた市場の開拓と、リスクに直面した際の自助努力的な修正能力によって維持されているものと我々は信じ込んでいる。こうした思考を道徳的防衛の観点から説明するならば、我々はリスクや失敗を不幸にも抱え込んだ際、それらを間違っても自らの無条件的な悪の結果として引き受けないようにするために、自己責任や自助努力といった一般に共有されている規範的要請へと助けを求めているのである。語弊を恐れずに言うと、条件的な悪として踏み止まらねばならない我々にとっては、自己責任論はむしろ「救い」として映っているのである。そうした道徳原理(道義)の下で責められている間は、未だ無条件的な悪として現出しているわけではないため――

た自分以外の人間も同じ原理の下で個々に鼓舞されているだろうという期待のため——「社会」は維持され、また自らも、かろうじて「社会」の一員で居続けることを許されていると感じるのである。それは、個人化された中での一種独特の「マゾヒズム」的な社会の維持であり、また、自らの(社会的)存在性の確証作業とも呼ぶことができる。

承認論の観点から見ると、そうした言説ないし思想を、社会的再生産のための道徳原理として社会に向けて「譲渡」したのは、紛れもなく自分たちの側だったと我々は考えている。つまり、元々は我々の側が社会の道徳的発展のために積極的に要求した承認形式であり、それが今や 180 度方向を変えて、個人単位で我々の側の道徳的欠陥——怠慢、鈍感、努力不足など——を指摘し鼓舞してくれているのだという発想である。かつては道徳的侵害を感じ取りその不正を訴えるツールであったものが、今度は我々の側の道徳的欠陥を察知しそれを責め立て、個人での管理・統治を巧みに促す道徳原理と化したのである。個人の側からすると、熾烈な競争意識の醸成へと導くこうした道徳的な圧力は、無条件的な悪にまで陥り苦悩することを防ぎ、条件的な悪の次元で苦悩することを可能とする。他方で社会(政治-経済システム)の側から見ると、それは、無条件的な悪の次元で存在を毀損されていることが悟られた結果勃発する由々しき事態、すなわち、一転して「無条件的な善」であることを求めている存在論的次元での大規模な批判と連帯が巻き起こることを一方では全力で回避しつつ、しかも他方では「条件的な善」、すなわち、かつてのように道徳的侵害とその回復を求めている認識的な批判と連帯が展開されることをも極力避けるべく編み出された、極めて巧妙な管理・統治の手法と言えよう。無条件的な悪から引き上げ、あくまで条件的な悪の次元で悩ませ自己統治を促すという点で、それは M. フーコーの権力論とも通ずるものがある。

個人主義の理念を自ら追い求めた結果、儂くも分断された諸個人にとって「無条件的な悪」という観念は、存在論的次元での批判はもちろんのこと、条件的な善であることを求めている批判と連帯であっても、自分自身のみならず周囲の身近な他者——親密圏にいる者、あるいは同一境遇の労働者仲間——をも巻き込み、自己責任などという話では済まされない過酷な連帯責任、すなわち、身体的生存すらも脅かす社会的制裁(社会的死)を身近にもたらしてしまうのではないかと、連帯的破壊への恐怖を指示している。

こうして我々は、いかなる社会批判の形態を構想することもままならず、一方で社会の側は——それが政治-経済システムを主に指す場合であっても、生活世界の諸領域を主に指す場合であっても——“すすんで”免

責され続けることとなる。残るのはただ、刹那的に過る説明不可能な「不毛感」のみである。

V 新たな批判と連帯のあり方とは? : 非対称性と(社会)臨床的な関係性を起点として

精神分析学を理論装置として絶対的依存期にまで遡り、ネオリベラリズム的社会状況における危機の本質を明らかにしようとしたのは筆者が初めてではない。日本では前出の檜村(2007, 2009)が、ラカン派社会学の観点から同様の分析を行っている。そこでは、〈再帰性〉すなわち、多元的で不断に更新可能な自己の形成へと向かわせる形式合理性と透明性が、当の再帰性それ自体の存立基盤でもある〈恒常性〉、すなわち「文化」と同義の、フィクショナルで実存性を孕み、人生早期において大文字の他者への全能イメージとナルシズムが十全に担保されたうえで得られる基本的信頼と創造性の領域を侵食してしまう事態と捉えられている。そこで檜村は、喪失の危機にある恒常性としての機能と、そこからの飛躍、すなわち、ナルシズム的閉塞からの「健全な」飛躍を約束する移行空間としての機能とを双方満たすような、豊饒な「文化」空間の(再)構築が急務であると述べている。

日暮(2018: 6-7)もまた、自分たちの不正意識を表現する場としての文化的公共空間の必要性を訴えているが、しかしながらここまで見てきたように、個々に分断されたうえに、防衛的に自らの道徳的欠陥を提示し、それへの道義的追及をすすんで享受することによってこそ、社会は維持され、また自らも他者も生かされているのだと感じる他ない我々にとって、そうした公共空間の構築はまさに至難の業である。加えて言うと、当の「文化」という概念自体が、良くも悪くもその抽象性、不透明性、そして可塑性ゆえに自在に意味変換され、(檜村も警告しているところの)再帰的な運動を一切認めないほどの原理主義へのナルシズム的退行か、はたまた、ネオリベラリズム的管理型主体形成につきものの、ナショナリズムの昂揚に向けた文化・伝統の「捏造」という事態が方々で起こっている。自己の「偽性」にも社会の欺瞞性にも気付くことができず、また他者との本質的な苦悩の共有による連帯も危険すぎてままたまならないと感じる我々は、現前に用意されたそうした似非公共空間に容易く引き寄せられ、同一境遇にあるはずの仲間を今度は道徳的に攻撃する立場にさえなってしまう——“仲間を鼓舞しているにすぎない”といった欺瞞的正当化を伴って。そうなると、社会批判のための文化空間の構築はますます困難となり、唯一の拠り所であった「不毛感」も、仲間への攻撃という形で昇華され霧散してしまいかねない⁹⁾。

本来ならば、こうした事態に陥る前に手が打たれていなければならない。つまり、刹那的に過る不毛感を頼り

に、そこから失われてしまった批判的潜勢力の醸成を促し、文化空間の再構築に向けた連帯への気概をもたらすような「外的介入」がなされている必要があるのだ。

1-2 で述べたように、ホネットに懐疑的な立場からは、彼の個別の相互行為場面に根差した承認論は、ルカーチ物象化論に息づく社会理論的分析眼を著しく損なう愚論に映った。だが、むしろ個別具体的な局面に密着した議論だからこそ、**文化的公共空間がいかなるローカルな実践によって立ち上げられていくべきなのか**、その建設的なプロセスを困難ながらも示すことができるのではないのか。試論の域は出ないものの、単に人間の普遍的精神構造の分析に留まらず、(ホネットと同様に)個別具体的な経験に根差した、「治療論」としての側面も持つ精神分析的対象関係論、そしてそれを理論装置に再構成が施された承認論だからこそ、かかる難題に取り組むことができるのではないかと筆者は考える。

5-1. 治療者の存在との「臨床的 - 非対称的關係」のなかで：「抱える環境」を通じた本源的承認の付与

従来の承認論において想定されている社会批判と連帯のプロセスは、筆者の見るところ、道徳的自律性の何たるかを予め熟知した諸個人によって自発的に展開され、かつ——(ルカーチの想定するような)観念論的な階級意識の形成とは異なるもの——同一の剥奪経験や侵害という境遇に置かれた他者との、すぐれて認識的な苦悩の共有によって支えられていた¹⁰⁾。そうしたイメージは従来の愛の形式にも当てはまる。というのも、相対的依存期に潜在する精神的危機は、情動性を帯びたものとはいえ、あくまで**本当の自我による健全な衝動の支配と欲動への転換に伴う〈個人化〉に向けた端緒を獲得した“後”の話であり、外的世界(環境)に対する認知的な対象把握の端緒を無事通過した“後”の話だからである。**

他方、繰り返すように、そうした自律的モメントの通過“以前”に潜在する存在論的危機を克服せねばならない我々は、容易には上記のような連帯に臨むことはできない。不毛感があっても、絶滅の脅威と原初的防衛戦略としての偽りの自己、そして道徳的防衛が染みついた我々は、本質的な「不正意識」の生成という目標を自主的に達成することなどできないからである。そこで何よりも、刹那的に過る不毛感を、現代に固有の危機として察知し、受け止め、自由な表出を促す環境、すなわちウィニコットが偽りの自己の治療論のなかで強調した「**環境としての治療者**」的存在が求められる。それは、人生早期に非侵襲的な環境であるべきだった準抛人格に比せられ、高森の言うように「治療者の行為 (doing) よりも、**在り様 (being)** を重視するものであ」(高森 2000a:

108) する。不毛感を前に性急な解釈で応じるのではなく、ウィニコットの言う「抱える (holding)」という在り様を通じて、衝動段階での欲求の無秩序性に通底する散発的な不毛感を、徐々に対象を志向することの可能な欲動段階に準ずる経験へと方向付ける必要がある。

こうした「臨床性」を帯びた関係は、同時に「非対称」な関係でもある。とはいえそれは、絶対的依存期における原初的没頭に比せられるように、衝動領域に関与するという意味で相手の内的「自然」に入り込み、まずはその内部から存在論的危機の様態を汲み上げ、情動的な同一化を通じて欲求の正当性と存在の連続性を担保していくといった、「対象」としてではなく「**抱える環境**」としての**一次元性と非人称性**を可能な限り維持する態度である。したがって、最初から自然支配のみを目指す啓蒙的関与(ホルクハイマー=アドルノ)とは当然ながら一線を画すし、加えて、啓蒙的理性としての現れ方を回避したとしても、相変わらず自然を理性から切り離し、後者の次元において言語的行為に内在する倫理的機能に託そうとする立場(ハーバーマス)とも一線を画す。この点で、出口(2002)が E.フロムに見出す「臨床の知」、すなわち、後述のように理性的認識を維持する必要はあるものの、それを自然との一次元性、連続性のなかで捉え、衝動に根差す(身体と不可分の)情動経験にまずもって寄り添うといった知の形態と通ずるものであり、それによってこそ、毀損された本源的承認の修復が見込まれるのである。

畢竟、この臨床的な関係には、本源的承認の修復と、剥奪経験として存在論的危機への気付きを促すといった、両面的な効果を狙ったものでなければならぬ。前者を通じて個人は、人生早期に凍結した「本当の自我」の実感(強さ)に徐々に圧倒され、不毛感はますます強固なものとなり、偽りの自己と道徳的防衛の「偽性」に対し自己不信感を強めることとなる。こうした、本源的承認の修復による本質的な自己理解が一方でなされたうえに、不毛感の根源にあった危機=剥奪性を掘り当て、相対化するという作業が展開されるのである。以上のように、従来の承認論とは違い、まずは「**実存性に根差した承認が経験されるとは一体どういう事態なのか**」ということ、情動的に実感させることが必要となるのだ。

5-2. 開かれた批判と連帯に向けて：治療者の存在の「失敗」を糧に

さて、自らの「偽性」に対するより本質的な不信感が惹起され、またそれが自らの生得的な選択の結果では必ずしもなく、何らかの剥奪経験によるものではないかという実感が芽生えてくれば、次の段階として、抱える環境であった一次元的臨床関係に、一種の亀裂が生じな

ればならない。その亀裂が、未だ自分自身にベクトルが向けられている不信感を、外的対象＝社会に対する批判へと転換させる契機となるのである。

今一度ウィニコットの治療論を見ると、環境としての治療者に徹していた者は、引き続きその役割に徹しつつも、それとは矛盾するようなもう一つの役割をも受け持たねばならないという。それは、人生早期の危機＝剥奪経験に対する「怒り」を惹起することであり、真つ当な批判意識を生じさせることを可能とする「失敗」を、恐れずにすることができるというものである (Winnicott [1967] 1989: 199= 1998: 116)。彼が言うには、クライアントが陽性転移を展開するなかで不満や怒りをぶつけられるものであれば、些細な解釈をめぐる間違い、「抱える」という在り様のなかで生じる〈対象〉としての一時的な現われなど、いかなるケースの振る舞いであっても「利用可能な失敗」になりうるという。重要なのは、失敗の中身というより、それをきっかけに**クライアントが非対称的な位置を占める治療者を責めることができるかどうか**にある。

ともあれ、この利用可能な失敗を、ネオリベリズム批判という社会理論的文脈で理解するならば、いかなる契機が当てはまるのか。それは、これまで本源的承認の修復に努めてきた治療者的存在が、従来のような承認的振る舞い、あるいはそれに準ずる規範的な理念を随所で表出するといった事態が想定されるのではないか。つまり、個人主義の理念、法的統治による平等性の担保、社会的地位の配分と保障といった手立てを、**問題解消のための誤った方途**として提案しようとする態度である。存在の連続性を取り戻しつつある個人は、かかる治療者的存在の態度に欺瞞性を感じはじめ、不信感や怒りを抱く。そのなかには、剥奪経験として危機の本質を受け止めることによる、道徳的防衛を通じた罪悪感の解消とその罪の正当な問い質しという能動的モメントが含まれている。個人はこのプロセスを通じて、治療者的存在を、健全な発達プロセスにおける移行対象に比せられる存在として利用し、**錯覚から脱錯覚へ、すなわち、環境として抱えられるままであればナルシズム的な閉塞へと陥っていたところを、非人称的で未分化だった治療者を人称的〈対象・人格〉として相対化し、認知し、擬似的な怒りを投げかけることで、開かれた社会への認識的関わりを創造することとなる。**

既述のように、要請される臨床的關係は、一貫して啓蒙的關係と一線を画さねばならない。それは、この第二段階においても言える。そこでは治療者的存在は、歴史超越的な全能者であってはならないのである。前世代における失敗を引き連れることで、個人に真の批判意識を醸成させると同時に、さらに歴史性、歴史的感覺をも

吹き込むのである。それによって、現状の変革可能性を個人のなかに、自発的に芽生えさせるのである。

そしてまた、この治療者的存在の失敗を通じて個人は、大文字の他者に対する幻想的信頼から目覚めることで、一般化された他者へと視野を広げることとなる。そこでようやく、同一の境遇に置かれ、同一の苦悩を有し、そしてまた、同一の批判と変革可能性を有する他者との連帯を目指す段階へと入っていく――。

『物象化』以降、ホネットは、本源的承認をめぐる議論を深める方向には向かっていない。わずかに言及している箇所でも、「人間の生活世界は歴史に依存した規範と実践からも成り立っているため、本源的承認の学習プロセスは〔それに向けた〕たかだか第一のステップとみなされるにすぎない」(Honneth 2011: 396)とあるように、社会的 - 歴史的動向との関わりにより深くコミットし得る従来の承認論――相対的依存期以降の、「子どもたちがそうした規範を獲得すべく学ばねばならない社会化のプロセス」(Honneth 2011: 396)――に比して、もはや理論的な重要性を感じていないように見受けられる。

筆者の考えは真逆である。これまで述べてきたように、むしろ今後は、物象化 - 本源的承認という次元での問題状況のさらなる追究と、それを通じた有意義な批判と連帯の可能性の模索にこそ、より一層取り組まねばならない。

[注]

1) 管見の限り、ホネットは「認識 (Erkennung)」を、専ら (承認の体験あるいは要求が焦眉の問題となる際の) 間主観的關係それ自体のありようを示す概念として用いている。したがって「認識に先立つ承認」とか「承認に敏感な／敏感でない認識」といったように、同じく間主観的關係のありようを意味する「承認」概念と同一の地平で使用される。他方で「認知的 (kognitive)」という表現は、専ら、他者から一方的に得る、もしくは他者に対し一方的に要求する関係「様式 (Weise)」の性質、あるいは、個人のなかでの内的な働きを示す概念として用いられる。たとえば「法 (権利)」の形式に関して、「普遍主義的な尊重の類型が、もはや情緒と結びついた態度としてではなく、情動的な感情の働きをまったく内的に制限する純粋に認知的な理解がもたらしたものとしてとらえることができるにすぎない」(KuA 148)とあるように、認知は「情動 (的働き)」という、こちらも関係様式の性質を示し、かつ個々人内部での心的働きを示す概念と同一の地平で使用される。以上のように厳格な違いがあるものの、本稿では、「認知」的な関係様式が相互に展開・共有されることで総体としての「認識」的關係が担保される、という理解の下、これら双方の概念を相関的に捉える。

2) 『物象化』は元々、カリフォルニア大学で行われた講義を下

敷きにしたものであり、本講義には 3 人の識者 (J.バトラー、R.ゴイス、J.リア) が招かれ、それぞれコメントを寄せている。ホネットもそれらのコメントに対し応答しており、2008 年に出版された英語版、そして 2015 年に出版されたドイツ語版にその内容は収録されている。本論の引用文は、この「応答 (Erwiderung)」からの引用である。

3) ルカーチ物象化論の多層性と弁証法的契機は、この点で十分に引き継がれているのではないかと筆者は考える。

4) ここに、高森も言うように、「現実逃避的な防衛や退嬰的な自己欺瞞として処してきた」(高森 2000a: 102) 旧来の精神分析におけるナルシズム観との根本的な相違が認められよう。

5) フェアベーンの言う「リビドー」は、高森 (2000b: 69) も言うように快感希求的なものではなく、専ら対象希求的なエネルギーを指す。

6) その後、スピッツらの育児援助によって回復したものの、スピッツは「この子供の場合、われわれは最初の直接生命をおびやかされるような反応を克服したあとでも、おそらく後になって精神身体的な後続現象に遭遇することになるだろう——たとえそれは前の場合ほどの重大さではなかったにしても。最初の 3 ヶ月における嘔吐の多くの場合は、この種の範疇に属する」(Spitz 1960=1965: 105) と付け加えている。

7) ウィニコットによると、「自死」という選択は、「幼児にとって本物 (real) と感じられ、結果的には、自発性さえも犠牲にし、死ぬことさえできるような余裕すら持てる自己を有すること」(PMP 304=371) が条件となる。したがって、偽りの自己によって、本物と感じられる自己とその起源をすっかり覆い隠すこととなった個人は、自ら死ぬことすらできないことになる。

8) これは自我の「強さ (strength)」をめぐる時代診断上の位置づけ方にも言える。ホネット (OpI 228) は、自我の「強さ (Stärke)」という考え方が、出口 (2011: 431) の言うように、フロイトに由来する抑圧対抗的な近代自律的個人の様相を帯びたものと捉え、今やそれが「生き生きしていること (Lebendigkeit)」という概念に取って代わられたと考えている。つまり、「自身の人格の数多くの側面に自らを開いていく能力」(OpI 228) を有するものとして、自我の役割自体が変化したと考えているのである。だが筆者から見ると、たとえその「内面が生き生きしていること」=「柔軟性」がポストモダン社会において強く求められ、個々人が実際にそれを能力として発揮し得るにしても、あくまでそれは〈自己〉レベルで展開されるものであり、相変わらず〈自我〉のレベルにおける「強さ」に——偽りの自我という道を選択する場合であっても——支えられているのである (もっともそれは、超自我との緊張関係のなかで捉えられる抑圧対抗的な強さとは違った、専ら衝動欲求との緊張関係のなかで人生早期より発揮される「強さ」であるため、フロイトに由来するという意味での近代理想的な自律性とは異質ではある。注 9 も参照)。ここでもまた、「強さ」と「生き生きしていること」とは矛盾も対立もせず、前者が後者の発

展をむしろ規定していると考えらるべきである。

9) 先に筆者は、道徳的防衛は一種独特のマゾヒズムであると述べたが、ここではそのマゾヒズム的な態度を他者 (仲間) にも強いるという意味で、一種のサディズム的力動への転換が見出される。一見それは、かつて E.フロム (1941=1951) がナチズム批判の文脈で論じた、近代的な自律的個人の病理形態としてのサド-マゾヒズムと重なる。しかしながら、両者には明確な違いがある。

第一に、フロムの言うマゾヒズムは自発的な服従、しかも明確な権威に対する服従の形式を指すが、道徳的防衛においてはそうした明確な超越的存在、ならびにそれへの服従という形式を必ずしも所与のものとは考えていない。社会からの規範的要請を「権威からの外的な力」と理解することも可能かもしれないが、かかる外的な力に乗じて自らの「無力感」を解消し、反動的に自らの力を誇示することが、道徳的防衛の真の目的ではないのである。それは、背景にある不安が、無力感や劣等コンプレックスではなく「不毛感」、そしてまた無条件的な悪の感覚であるという事実に起因している。存在の連続性を毀損され、この世に存在しようと欲すること自体を悪、危険と感じる個人は、反動的かつ暴力的に自らの実存性を回復し「善」たろうとするという発想は、そもそも取ることができない——善であることと自体が危険で悪なのだから。彼は条件的な悪たろうとすることで精一杯であり、したがってその際に現れるマゾヒズム性とは、自身の存在の毀損された部分を、非人称的な「社会」からの道徳的圧力という契機によって修復しようとする試みとして理解されねばならない。

第二に、サディズムの意味合いも根本的に異質である。フロムの言うサディズムは、元々の権威との支配-服従関係に模した、垂直的な支配-服従関係の固定化を他者との間に望むものである。一方で道徳的防衛から発せられるサディズムは、あくまで水平的な関係の只中で発せられる。つまり、水平的な関係自体を破壊したり改変したりすることを望んだ行為ではない。それは、自身の抱える無条件的な悪という名の無意識的不安を仲間にも投影したうえで、同じ実存的な危機を抱えているであろう仲間に対し救済ないし鼓舞という意味でなされる道徳的な圧力 (攻撃) である。確かに、本論でも述べているように、それによって幾分は自らの不毛感も紛らわすことはできるだろうが、そのこと自体が目的ではなく、あくまで仲間も無条件的な悪に陥らせないということ、そしてそれによって社会全体を道徳的に維持するということが、仲間を“道徳的に”追い詰めることの真意なのである。無論、そうした目的が欺瞞的なものであり、正当化できるものではないことは言うまでもない。

サド-マゾ的力動をめぐるこうした相違は、理論的に言うと、いかなる内的審級との葛藤を経験している「自我」を想定するか、という点での相違に起因している。注 8 でも述べたように、フロムと同様に筆者も、自我の発する「力」ないし「強さ」という契機については認めているし重視している。だがフロムが

重点を置くそれは、内的に確立済みの超自我との間の情動的葛藤を通じて惹起された「力」である。対して筆者の場合は、それ以前のイド、ないし衝動欲求との間の情動的葛藤を通じて惹起される「力」であり「強さ」に重点を置いている。確かに、後者の場合でも、背景に準拠人格という初発的権威による剥奪経験を指摘することは可能だが、主観的には、乳児は自らの生得的な潜在力のなかに破滅的な脅威を感じてやまない。権威との情動的関係のなかで培われた無力感ではなく、自身の実存的な存在欲求のなかに感じ取られた悪や脅威が焦眉の問題となる場合、頼るべき「力」や「強さ」は、反動形成的な現状からの抜本的回復——“マイナスから一転してプラスへ”という発想——のために活用されるのではなく、悪や脅威を感じる程度(閾値)を少しでも引き上げる——“耐えられないマイナスから耐えられる程度のマイナスへ”という発想——ために用いられる。社会や仲間といった存在は、そうして自らが耐えられる程度の悪であり続けられるために、一貫して道徳的であってもらわねばならず、そのために個人は、やむを得ず仲間を道徳的存在たらしめようとして攻撃せざるを得ない場合もある。したがって「攻撃(サディズム)」という契機は、道徳的防衛の観点から見るとそれ自体が目的なのではなく、あくまで手段ないし結果にすぎない。

10) ところで、今一度、ルカーチ物象化論の批判的摂取という文脈に目を向けると、単にホネットがルカーチの言う「商品交換の資本主義的一般化」に留まらない物象化の「社会的病因」を探るのみならず、「観念論的な階級意識の形成」とは違った物象化からの克服の可能性を探ることをも、自身の社会分析的課題としていたことがわかる。彼は、ルカーチが人間学的・社会存在論的素地を持ちながらも、物象化された状況の止揚(ならびに資本主義的社会形態の克服)を、「労働者階級が自分たちが実際に常にすでに行なってきた産出行為の事実を自覚する、そういった行為としてのみ考えることができる」(V 34=37)として、階級意識の形成へと向かう弁証法的な思考に可能性を見出した点に触れている。ホネットによれば、極限まで貶められ客体化された生活ゆえに、弁証法的思考の歩みに従い自発的な方向転換を通じて「社会的諸対象はたんなる物ではなくて人間関係にほかならない」(Lukács [1923] 1968: 366=1975: 321)といった認識が出現せざるを得ないという歴史哲学的思弁それ自体は否定しておらず、むしろそこから、「意識から遠ざけられている事態=忘却」として物象化を定義するエッセンスを引き出している(V 34=38)。だが他方で、正しい人間的実践というものを、労働者階級(主体)による客体の産出行為のなかに見ようとするルカーチを「過剰な観念論」(V 34=38)と呼び、斥けるべきとも考えている。筆者の目からすると、それは、単に主体による客体の産出行為という観念論の〈形式〉を斥けよという主張のみならず、特定の階級のみ、自己の階級的位置を自覚し、それを全体の社会的変革と発展の自己意識へと醸成し、客体の構造的変化をもたらすといった、歴史的発展の同一性原理

を認めようとする観念論の〈内容〉をも斥けよ、という主張に映る。グローバル化と雇用の流動化が著しい社会状況のなかで、階級という単位ではもはや括れない連帯のプロセスを、〈形式〉と〈内容〉の両面において構想せねばならないというホネットの問題意識が透けて見える。

[文献]

- Boltanski, L. et Chiapello, E., 1999, *Le nouvel esprit du capitalisme*, Paris: Gallimard. (=2013, 三浦直希・海老塚明・川野英二・白鳥義彦・須田文明・立見淳哉[訳]『資本主義の新たな精神(上下)』ナカニシヤ出版.)
- Chari, A., 2010, "Toward a Political Critique of Reification: Lukács, Honneth and the Aims of Critical Theory," *Philosophy and Social Criticism*, 36 (5): 587-606.
- Dardot, P. et Laval, C., 2009, *La nouvelle raison du monde: Essai sur la société néolibérale*, Paris: La Découverte. (=2013, Elliot, G. (trans.), *The New Way of the World: On Neoliberal Society*, London / New York: Verso.)
- 出口剛司, 2002 『エーリッヒ・フロム——希望なき時代の希望』新曜社.
- , 2010 「アクセル・ホネットの承認論と批判理論の刷新——批判理論はネオリベラリズムの変革をどう批判するのか」『現代社会学理論研究』4: 16-28.
- , 2011 「批判理論の展開と精神分析の刷新——個人の終焉から新しい個人主義へ」『社会学評論』61 (4): 422-39.
- Dorahy, J. F., 2015, "The Breakdown of Reflexivity: Recognition, Reification and the Fragmentation of Experience," *Critical Horizons*, 16 (4): 371-92.
- Fairbairn, W. R. D., 1940, "Schizoid Factors in the Personality," in: 1952, *Psychoanalytic Studies of the Personality*, London: Tavistock Publications, 3-27. (=1992, 山口泰司[訳]「人格における分裂的要因」『人格の精神分析学的研究』文化書房博文社, 19-70.)
- , 1941, "A Revised Psychopathology of the Psychoses and Psychoneuroses," *International Journal of Psychoanalysis*, 22 (3-4): 250-79, reprinted in: 1952, *Psychoanalytic Studies of the Personality*, London: Tavistock Publications, 28-58. (=1992, 山口泰司[訳]「精神病と精神神経症の、修正された精神病理学」『人格の精神分析学的研究』文化書房博文社, 71-128.)
- , 1943, "The Repression and the Return of Bad Objects (with special reference to the War Neuroses)," *British Journal of Medical Psychology*, 19 (3-4): 327-41, reprinted in: 1952, *Psychoanalytic Studies of the Personality*, London: Tavistock Publications, 59-81. (=1992, 山口泰司[訳]「抑圧と、悪い対象の回帰(とくに戦争神経症に言及して)」『人格の精神分析学的研究』文化書房博文社

- 社,129-72.)
- Fromm, E., 1941, *Escape From Freedom*, New York: Farrar & Rinehart. (=1951, 日高六郎[訳]『自由からの逃走』東京創元社.)
- Hall, T., 2011, "Returning to Lukács: Honneth's Critical Reconstruction of Lukács' Concepts of Reification and Praxis," Thompson, M. J. (ed.), *Georg Lukács Reconsidered: Critical Essays in Politics, Philosophy and Aesthetics*, London: Continuum, 195-210.
- 日暮雅夫, 2008『討議と承認の社会理論——ハーバーマースとホネット』勁草書房.
- , 2018「新自由主義への批判的社会理論の対抗戦略」『立命館産業社会論集』53(4): 1-13.
- Honneth, A., [1992] 2003, *Kampf um Anerkennung: Zur moralischen Grammatik sozialer Konflikte*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (=2014, 山本啓・直江清隆[訳]『承認をめぐる闘争 [増補版] ——社会的コンフリクトの道徳的文法』法政大学出版局.)
- , 2000a, „Zwischen Aristoteles und Kant: Skizze einer Moral der Anerkennung," Edelstein, W. und Nunner-Winkler, G. (Hg.), *Moral im sozialen Kontext*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 55-76, reprinted in: 2000, *Das Andere der Gerechtigkeit: Aufsätze zur praktischen Philosophie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 171-92. (=2005, 加藤泰史・日暮雅夫他[訳]「アリストテレスとカントの間——承認の道徳についてのスケッチ」『正義の他者——実践哲学論集』法政大学出版局, 186-209.)
- , 2000b, „Objektbeziehungstheorie und postmoderne Identität: Über das vermeintliche Veralten der Psychoanalyse," *Psyche*, 54 (11): 1087-107, reprinted in: 2003, *Unsichtbarkeit, Stationen einer Theorie der Inter-subjectivität*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 138-61. (=2015, 宮本真也・日暮雅夫・水上英徳[訳]「対象関係論とポストモダン・アイデンティティ——精神分析は時代遅れだという思い違いについて」『見えないこと——相互主体性理論の諸段階について』法政大学出版局, 199-233.)
- , 2001, „Das Werk der Negativität: Eine psychoanalytische Revision der Anerkennungstheorie," Böhleber, W. und Drews S. (Hg.), *Die Gegenwart der Psychoanalyse—Die Psychoanalyse der Gegenwart*, Stuttgart: Klett Cotta, 238-45, reprinted in: 2010, *Das Ich im Wir: Studien zur Anerkennungstheorie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 251-60. (=2007, 日暮雅夫・三崎和志・出口剛司・庄司信・宮本真也[訳]「否定性の仕事——精神分析の承認論的修正」『私たちのなかの私——承認論研究』法政大学出版局, 282-92.)
- , 2004, „Anerkennung als Ideologie: Zum Zusammenhang von Moral und Macht," *WestEnd. Neue Zeitschrift für Sozialforschung*, 1: 51-70, reprinted in: 2010, *Das Ich im Wir: Studien zur Anerkennungstheorie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 103-30. (=2017, 日暮雅夫・三崎和志・出口剛司・庄司信・宮本真也[訳]「イデオロギーとしての承認——道徳と権力の関連について」『私たちのなかの私——承認論研究』法政大学出版局, 113-44.)
- , [2005] 2015, *Verdinglichung: Eine anerkennungstheoretische Studie, Mit Kommentaren von Judith Butler, Raymond Geuss und Jonathan Lear und einer Erwiderung von Axel Honneth*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (=2011, 辰巳伸知・宮本真也[訳]『物象化——承認論からのアプローチ』法政大学出版局.)
- , Ganahl, J. (trans.), 2008, "Rejoinder," Jay, M. (ed.), *Reification: A New Look at an Idea*, Oxford University Press, 147-59, reprinted under the title of „Erwiderung," in: 2015, *Verdinglichung: Eine anerkennungstheoretische Studie, Mit Kommentaren von Judith Butler, Raymond Geuss und Jonathan Lear und einer Erwiderung von Axel Honneth*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 165-80.
- , Ganahl, J. (trans.), 2011, "Rejoinder," Petherbridge, D. (ed.), *Axel Honneth: Critical Essays: With a Reply by Axel Honneth*, Brill, 391-421.
- Honneth, A. und Haltmann, M., 2004, „Paradoxien der kapitalistischen Modernisierung: Ein Untersuchungsprogramm," *Berliner Debatte Initial*, 15: 4-17, reprinted in: 2010, *Das Ich im Wir: Studien zur Anerkennungstheorie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 222-48. (=2017, 日暮雅夫・三崎和志・出口剛司・庄司信・宮本真也[訳]「資本主義的近代化のパラドクス——研究のためのプログラム」『私たちのなかの私——承認論研究』法政大学出版局, 249-79.)
- 榎村愛子, 2007『ネオリベラリズムの精神分析——なぜ伝統や文化が求められるのか』光文社新書.
- , 2009『臨床社会学ならこう考える——生き延びるための理論と実践』青土社.
- , 2017「ネオリベラリズムの主体と倫理」唯物論研究協会 第 40 回研究大会シンポジウム報告レジュメ. (<http://www.zenkokuyuiken.jp/contents/taikai/40taikai/kashimura2>)
- Lukács, G., [1923] 1968, *Geschichte und Klassenbewusstsein (Georg Lukács Werke Bd.2 (Frühschriften II))*, Neuwied: Luchterhand. (=1975, 城塚登・古田光[訳]『歴史と階級意識』白水社.)
- 奥谷浩一, 2014「アクセル・ホネットの物化と承認の理論」『礼

幌学院大学人文学会紀要』96: 77-99.

Spitz, R., 1960, *Die Entstehung der ersten Objektbeziehungen*, Stuttgart: E. Klett. (=1965, 古賀行義[訳], 『母—子関係の成りたち——生後 1 年間における乳児の直接観察』同文書院.)

高森淳一, 2000a 「Winnicott のシゾイド論——偽りの自己」『天理大学学報』52 (1): 99-119.

——, 2000b 「Fairbairn のシゾイド論——分裂態勢」『天理大学学報』51 (2): 69-82.

Winnicott, D. W., 1950, “Aggression in Relation to Emotional Development,” Symposium with Anna Freud, Royal Society of Medicine, Psychiatry Section, 16th January, 1950, reprinted in: 1958, *Collected Papers: Through Paediatrics to Psycho-Analysis*, London: Tavistock Publications, 204-18. (=2005, 北山修[監訳] 「情緒発達との関連でみた攻撃性」『小児医学から精神分析へ——ウイニコット臨床論文集』岩崎学術出版社, 241-61.)

——, 1954, “Mind and its Relation to the Psyche-Soma,” *British Journal of Medical Psychology*, 27 (4): 201-9, reprinted in: 1958, *Collected Papers: Through Paediatrics to Psycho-Analysis*, London: Tavistock Publications, 243-54. (=2005, 北山修[監訳] 「心とその精神 - 身体との関係」『小児医学から精神分析へ——ウイニコット臨床論文集』岩崎学術出版社, 294-311.)

——, 1955, “The Depressive Position in Normal Emotional Development,” *British Journal of Medical Psychology*, 28 (2-3): 89-100, reprinted in: 1958, *Collected Papers: Through Paediatrics to Psycho-Analysis*, London: Tavistock Publications, 262-77. (=2005, 北山修[監訳] 「正常な情緒発達における抑うつポジション」『小児医学から精神分析へ——ウイニコット臨床論文集』岩崎学術出版社, 312-34.)

——, 1956, “Primary Maternal Preoccupation,” in: 1958, *Collected Papers: Through Paediatrics to Psycho-Analysis*, London: Tavistock Publications, 300-5. (=2005, 北山修[監訳] 「原初の母性的没頭」『小児医学から精神分析へ——ウイニコット臨床論文集』岩崎学術出版社, 365-72.)

——, 1960a, “The Theory of the Parent-Infant Relationship,” *International Journal of Psychoanalysis*, 41: 585-95, reprinted in: 1965, *The Maturation Processes and the Facilitating Environment*, London: Hogarth Press, 37-55. (=1977, 牛島定信[訳] 「親と幼児の関係に関する理論」『情緒発達 of 精神分析理論——自我の芽ばえと母なるもの』岩崎学術出版社, 32-56.)

——, 1960b, “Ego Distortion in Terms of True and False Self,” in: 1965, *The Maturation Processes and the Facilitating Environment*, London: Hogarth Press,

140-52. (=1977, 牛島定信[訳] 「本当の, および偽りの自己という観点からみた, 自我の歪曲」『情緒発達 of 精神分析理論——自我の芽ばえと母なるもの』岩崎学術出版社, 170-87.)

——, 1962, “Ego Integration in Child Development,” in: 1965, *The Maturation Processes and the Facilitating Environment*, London: Hogarth Press, 56-63. (=1977, 牛島定信[訳] 「子どもの情緒発達における自我の統合」『情緒発達 of 精神分析理論——自我の芽ばえと母なるもの』岩崎学術出版社, 57-66.)

——, 1963, “Communicating and not Communicating Leading to a Study of Certain Opposites,” paper given to the San Francisco Psychoanalytic Society, October 1962, and to the British Psycho-Analytical Society, May 1963, reprinted in: 1965, *The Maturation Processes and the Facilitating Environment*, London: Hogarth Press, 179-92. (=1977, 牛島定信[訳] 「交流することと交流しないこと——ある対立現象に関する研究への発展」『情緒発達 of 精神分析理論——自我の芽ばえと母なるもの』岩崎学術出版社, 217-36.)

——, 1967, “The Concept of Clinical Regression Compared with That of Defence Organisation,” paper given at a Psychotherapy Symposium at McLean Hospital, Belmont, Massachusetts, 27 October, 1967, reprinted in: 1989, *Psycho-Analytic Explorations*, 193-9. (=1998, 北山修[監訳] 「防衛組織化の概念と比較した臨床的退行の概念」『ウイニコット著作集 7 精神分析的探究 2 狂気の心理学』岩崎学術出版社, 107-16.)

——, 1972, “On the Basis for Self in Body,” *International Journal of Child Psychotherapy*, 1 (1), 7-16, reprinted in: 1989, *Psycho-Analytic Explorations*, 261-83. (=1999, 牛島定信[監訳] 「身体における自己の基盤について」『ウイニコット著作集 8 精神分析的探究 3 子どもと青年期の治療相談』岩崎学術出版社, 22-51.)